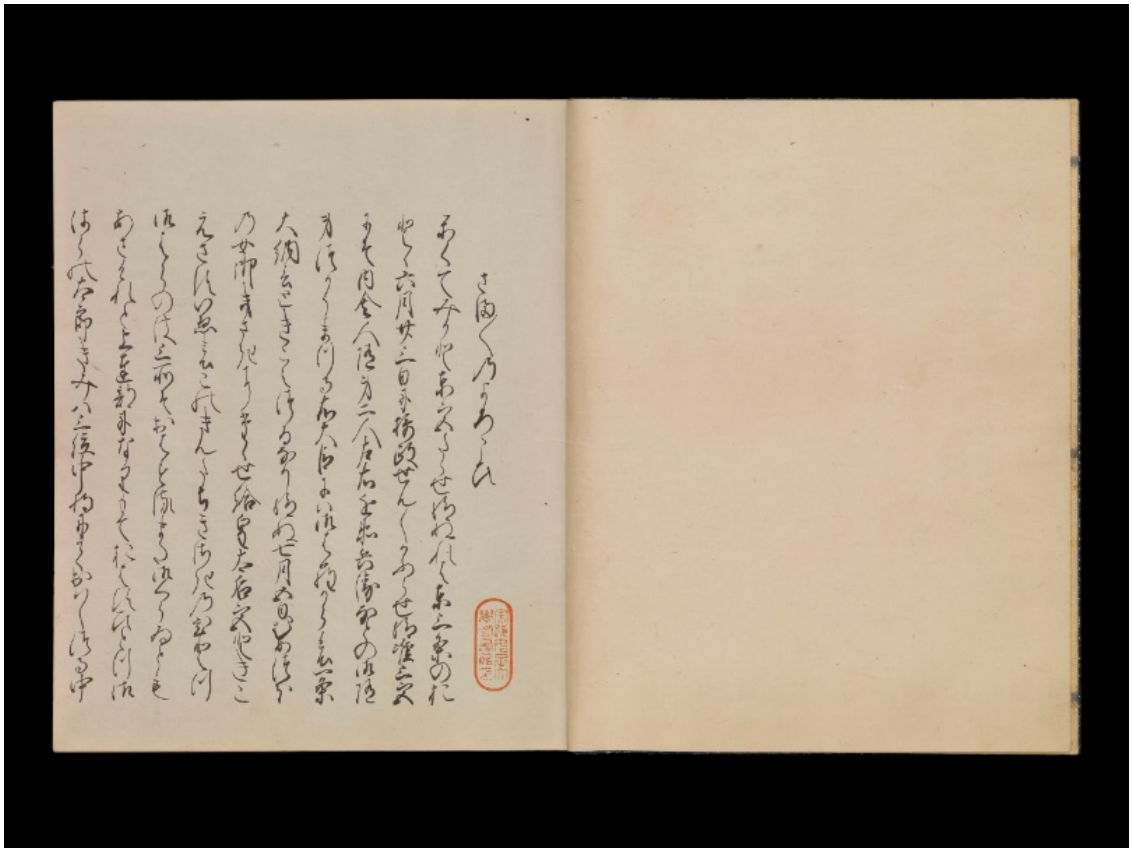
栄華物語　三　さまざまのよろこび　（68269）

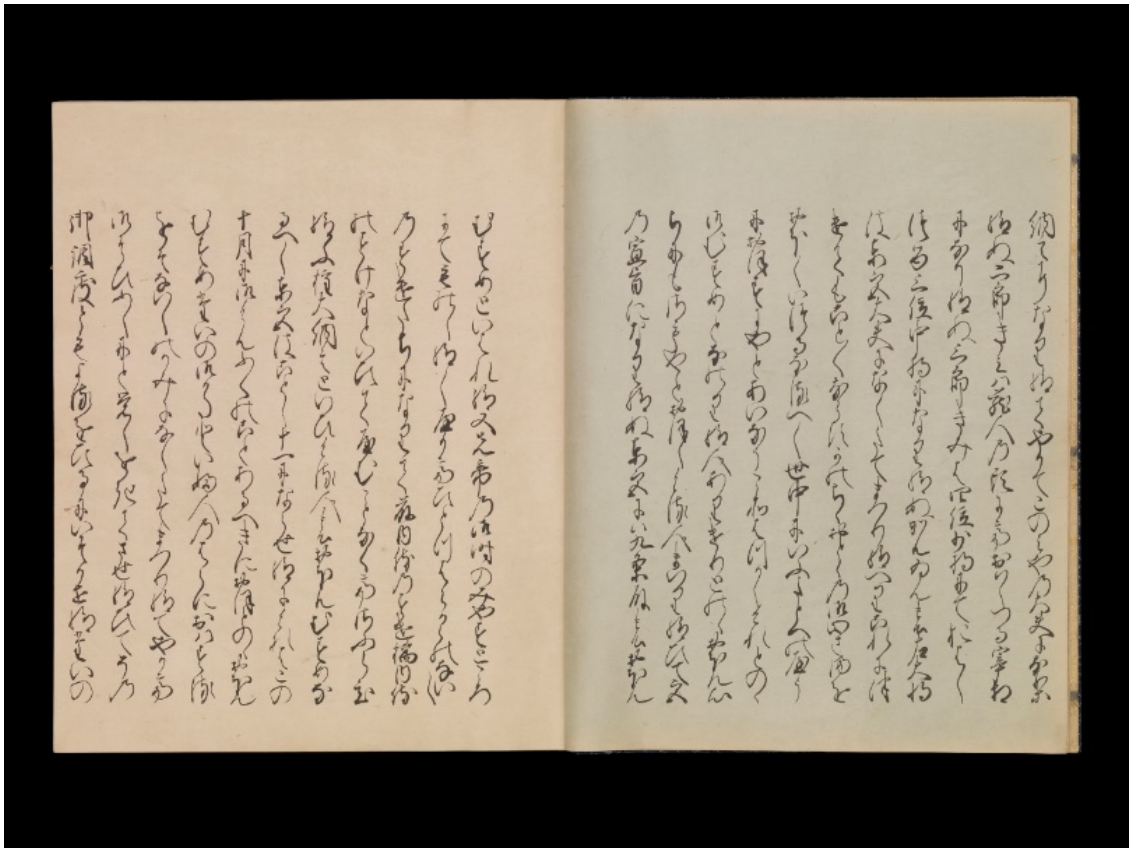
実践女子大学図書館

さまざまのよろこび　三

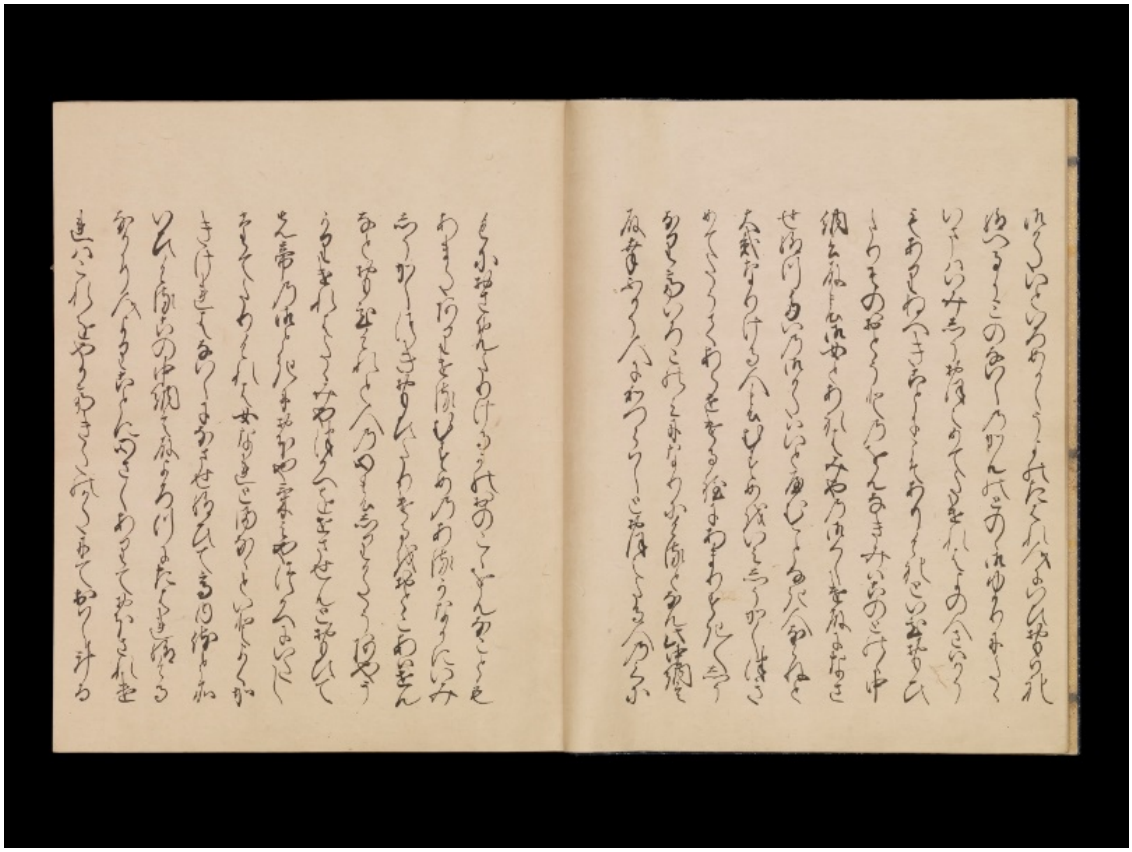


さまざまのよろこび

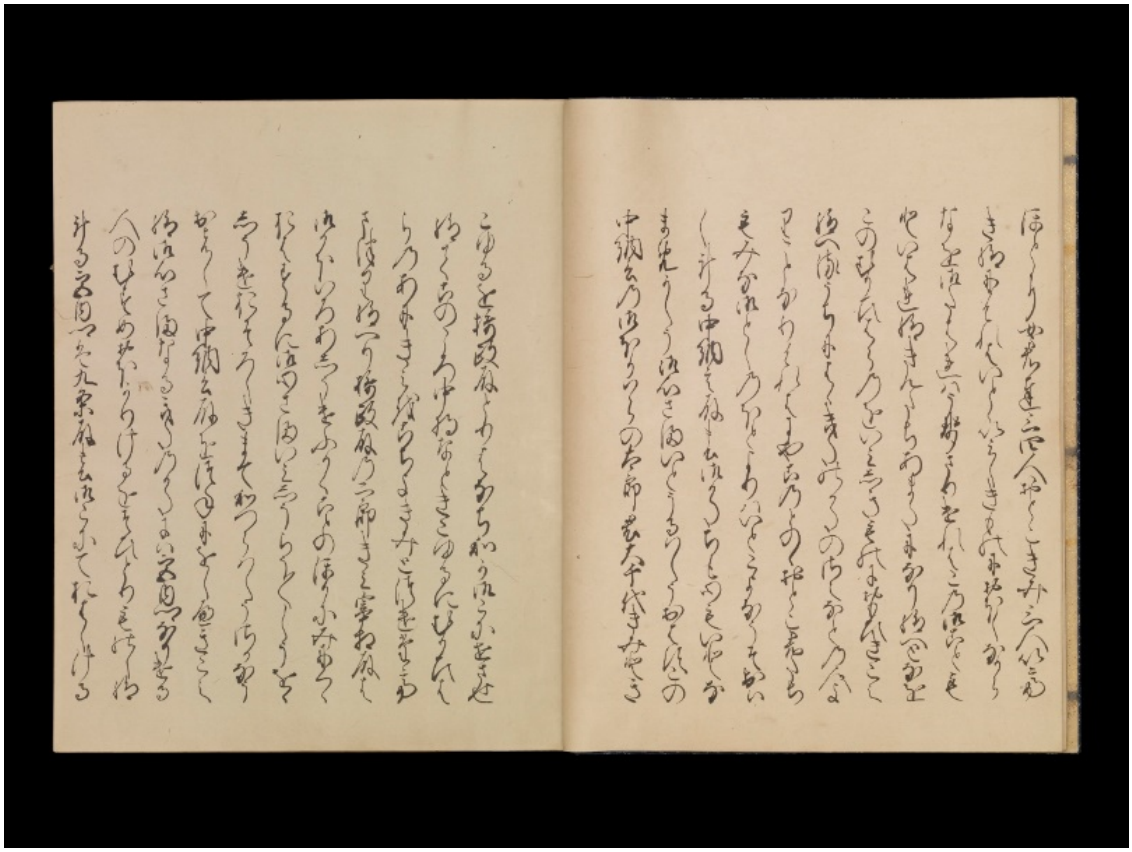
かくてみかど、東宮たゝせ給ぬれば、東三条のおとゞ、六月廿三日に摂政せんじかぶらせ給。准三宮にぞ、内舎人随身二人、左右近衛兵衛などの御随身つかうまつる。右大臣には、御はらからの一条大納言ときこえつる、なり給ぬ。七月五日むめつぼの女御、きさきにたゝせ給。皇太后宮ときこえさす。いゐのこのきんだち、きさきのひとつ御はらのは三所ぞおはする。まだ御くらゐどもあさけれど、上達部になりもておはす。ひとつ御はらの太郎ぎみは、三位中将にておはしつる、中



納言になり給て、やがてこのみやの大夫になり給ぬ。二郎ぎみは、蔵人の頭にておはしつる、宰相になり給ぬ。三郎中将ぎみは、四位少将にておはしつる、三位中将になり給ぬ。かんゐんの左大将は、東宮大夫になしたてまつり給へり。これにつけてもことごとならず、かのちゝおとゞの御心ざまをおぼしいづるなるべし。世中にいふたとへのやうにおぼすにやと、あいなうこそはづかしけれ。とのゝ御むすめとなのり給人ありけり。とのゝおほん心ちにも、さもやとおぼしける人、まいり給ひて、宮の宣旨になり給ぬ。東宮には、九条殿のおほんむすめといはれ給、又先帝の御時のみやすどころにてものし給し、やがてひとつはらからの、ないしのすけたちになりて、藤内侍のすけ、橘内侍のすけなどいひて、やむごとなくてさぶらひ給ふ。権大納言といひける人のおほんむすめなるべし。東宮はことし十一にならせ給にければ、この十月の御げんぷくのことあるべきに、おほとのゝおほんむすめ、たいの御かたといふ人のはらにおはするをぞ、ないしのかみになしたてまつり給て、やがて御そひぶしにと覚しをきてさせ給ひて、その御調度ども、よるをひるにいそがせ給。たいの

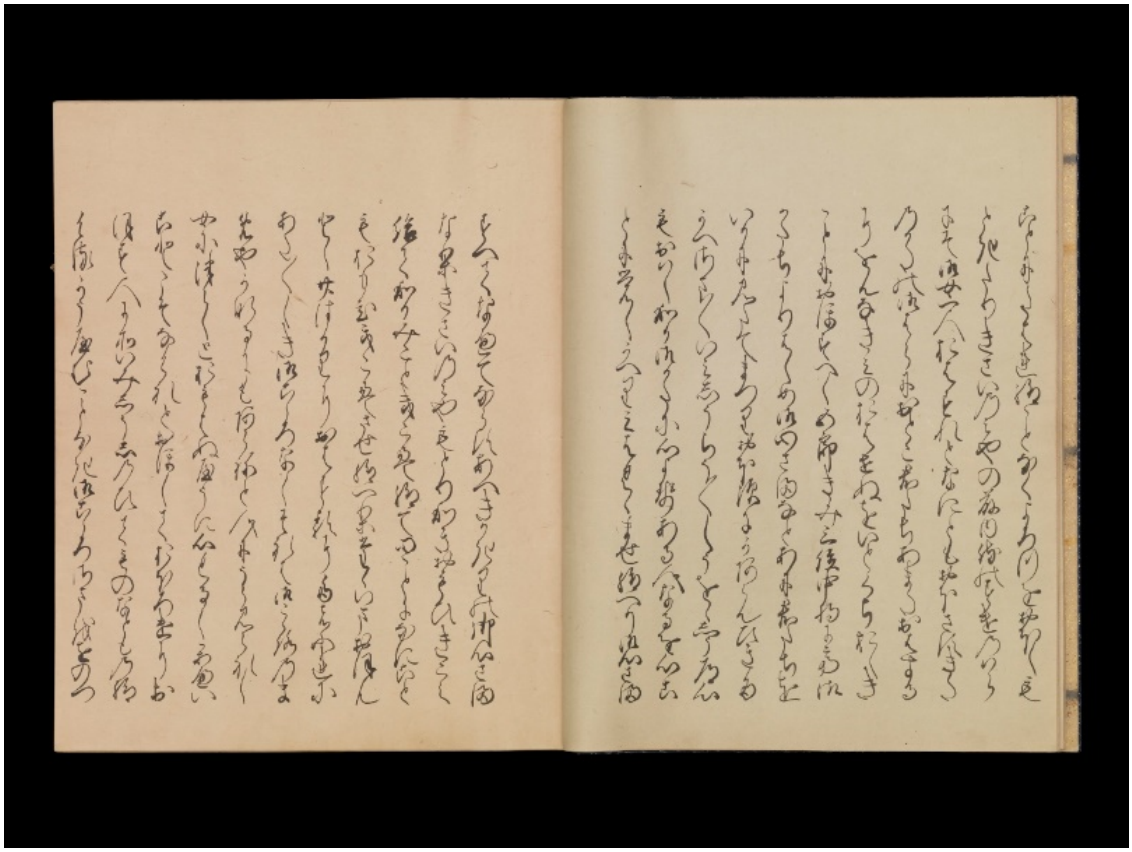


御かた、いといろめかしう、よのたはれ人にいひおもはれ
給へるに、このないしのかんのとの〻御ゆかりに、たゞ
いまはいみじうおぼえめでたければ、よの人、「さは、かう
もありぬべきことこそありけれ」といひおもひ
たり。そのおとうとのをんなぎみは、このとの〻中
納言殿の御女とあれば、みやの御くしげ殿になさ
せ給つ。たいの御かたは、いとやむごとなき人ならねど、
大貳なりける人の、むすめをいみじうかしづき
めでたうてあらせける程に、あまりすきずきしう
なりて、いろごのみになりにけるとなん。此中納言
殿、幸ふかう人にわづらはしとおぼえたる人の、くに
ぐにおさめたりける、かのおのこゞをんなごども
あまたありける、むすめのあるがなかにいみ
じうかしづきおもひたりけるを、おとこあはせん
などおもひけれど、人の心のしりがたうあやう
かりければ、みやづかへをせさせんとおもひて、
先帝の御ときに、おほやけみやづかへにいだし
たてたりければ、女なれど、まな〻どいとよくか
きければ、ないしになさせ給ひて、高内侍とぞ
いひける、この中納言殿、よろづにたはれ給ける
なかに、人よりことに心ざしありておぼさせけ
れば、これをやがてきたのかたにておはしける

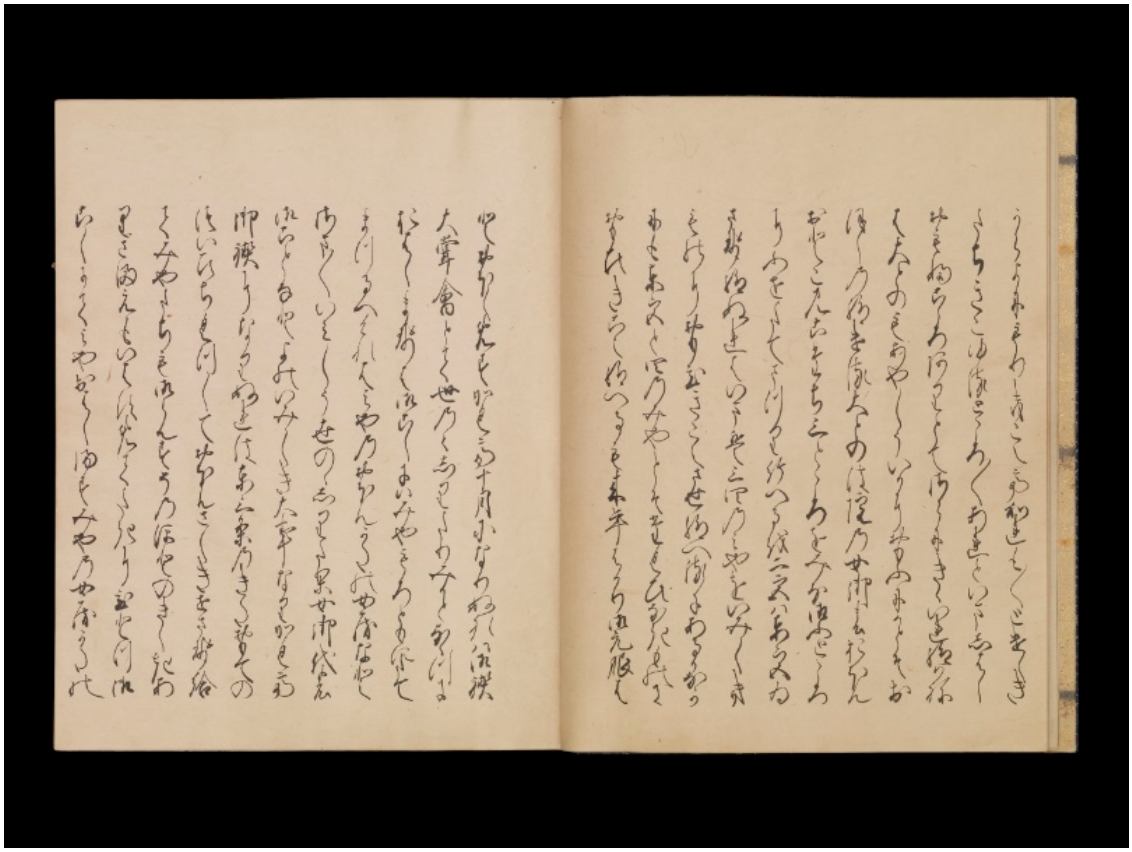


ほどに、女君達三四人、おとこぎみ三人いで
き給にければ、いとゞいみじきものにおぼしながら、
なを御たはれはうせざりければ、この御こども
といはれ給きんだちあまたになり給へど、なを
このむかひばらのをいみじきものにおもひきこえ
給へるうちに、はゝきたのかたのさえなどの、人よ
りことなりければにや、このとのゝおとこ君たち
もみな御としのほどよりはいとこよなうぞおは
しける。中納言殿の、御かたちも心もいとな
まめかしう、御心ざまいとうるはしうおはす。この
中納言の御ほかばらの太郎君、大千代ぎみとき

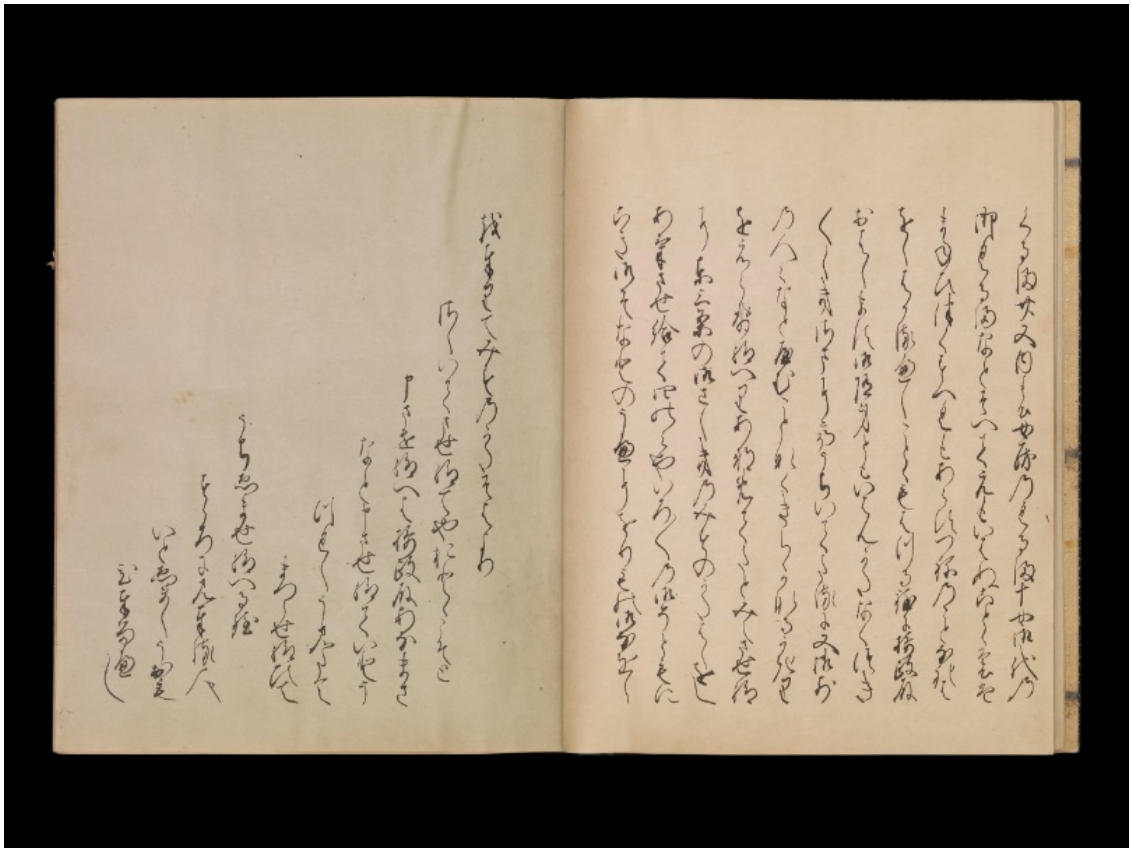
こゆるを、摂政殿とりはなち、わが御こにせさせ
給て、このごろ中将などきこゆるに、むかひば
らのあにぎみをこちよぎみとつけたて
まつり給へり。摂政殿の二郎ぎみ、宰相殿は、
御かほいろあしう、けぶかく、ことのほかにみにくゝ
おはするに、御心ざまいみじうらうらうじうをゝ
しう、けおそろしきまでわづらはしうさがなう
おはして、中納言殿をつねにをしへきこえ
給御心ざまなる。きたのかたには、宮内卿なりける
人の、むすめおほかりけるをぞ、ひとりものし給
ける。宮内卿は九条殿の御こにておはしける。



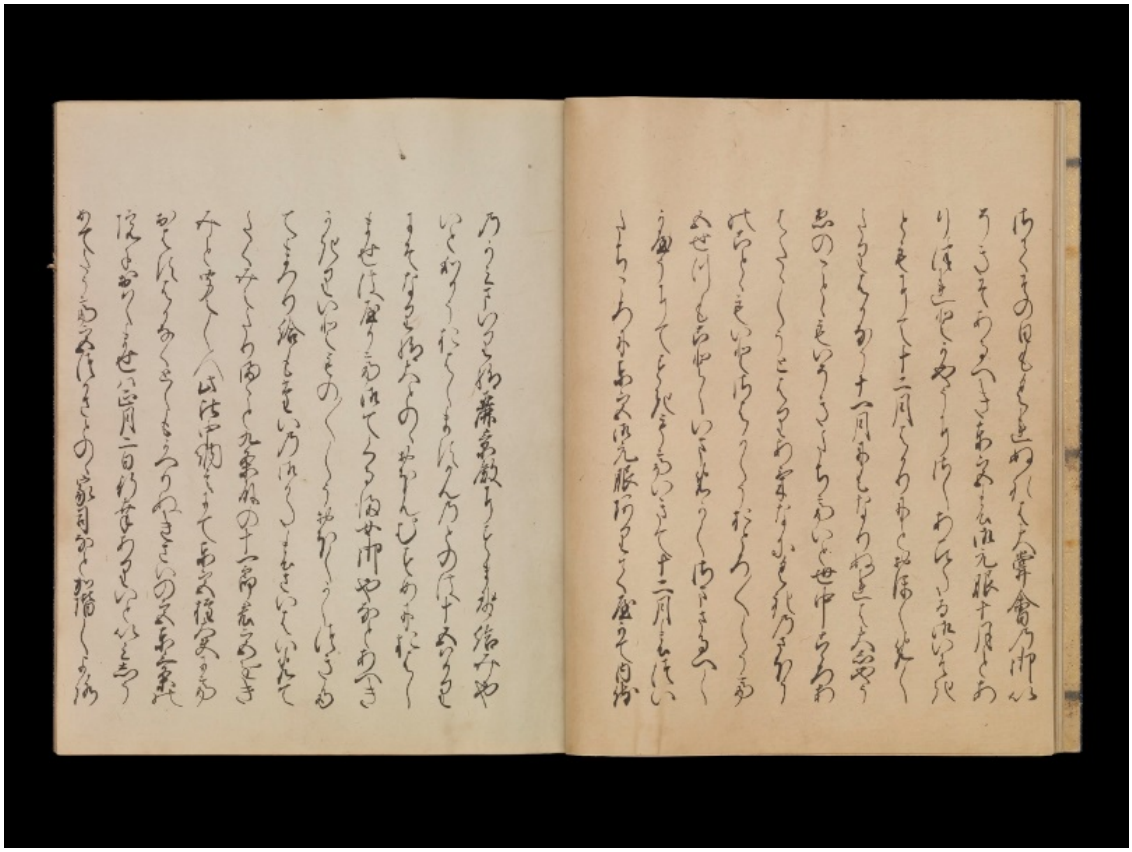
ことにたはれ給ことなく、よろづをおぼしも
どきたり。きさいのみやの藤内侍のすけのはら
にぞ、御女一人おはすれど、なにともおぼさず。きた
のかたの御はらに、おとこ君たちあまたおはする
に、をんなぎみのおはせぬをいとくちおしき
ことにおぼすべし。五郎ぎみ、三位中将にて、御
かたちよりはじめ、御心ざまなど、あに君たちを
いかに見たてまつりおぼすにかあらん、ひきた
がへ、さまざまいみじう、らうらうじうをゝしう、道心
もおはし、わが御かたに心よせある人なるを、心こ
とに覚しかへりみ、はぐゝませ給へり。御心ざま
すべてなべてならず、あべきかぎりの御心ざま
なり。きさいのみやも、とりわきおもひきこえ
給て、わがみこきこえ給て、心ことになにごと
もおもひきこえさせ給へり。たゞいまおほん
とし廿ばかりにおはするに、たはぶれに
あだあだしき御こゝろなし。それは御こゝろのま
めやかなるにもあらねど、人にうらみられじ、
女につらしとおもはぬやうに心くるしかべい
ことこそなけれとおぼして、おぼろけにお
ぼす人にぞいみじうしのびてものなどもの給
ける。かうやむごなき御こゝろざまをのづ



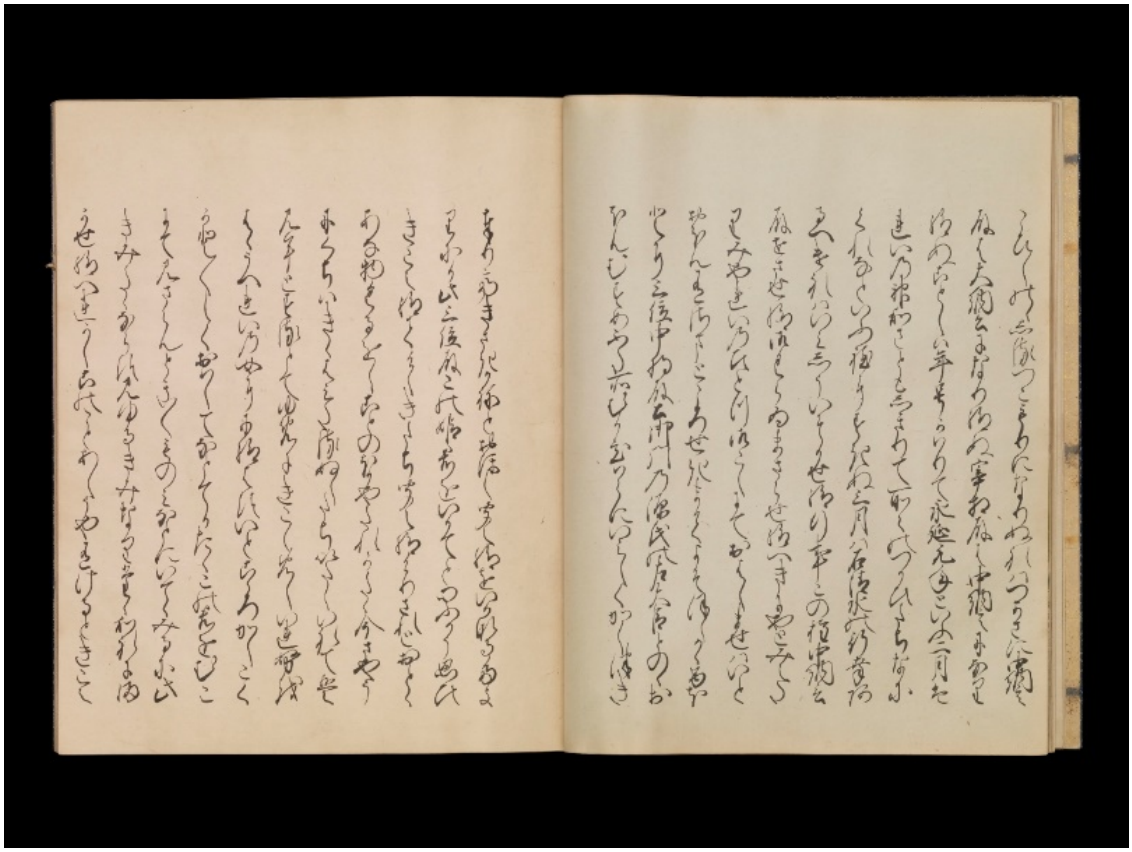
からよにもりきこえて、われもわれもとけしき
だちきこゆるところどころあれど、いましばし、
おもふこゝろありとて、さらにきゝいれ給はね
ば、大とのも、「あやしういかにおもふにか」とぞお
ぼしの給ける。大とのは、院の女御のおほん
おとこみこたち三ところをみな御ふところ
にふせたてまつり給へるを、二宮は東宮ゐ
させ給ぬれば、いまは三、四のみやをいみじき
ものにおもひきこえさせ給へるに、あるがなか
にも東宮と四のみやとぞたぐひなきものに
おもひきこえ給へるも、来年ばかり御元服は
とおぼしめす。かくて十月になりぬれば、御禊、
大嘗會とて、世のゝしりたり。みかどなゝつに
おはしませば、御こしにはみやもろともにたて
まつるべければ、みやのおほんかたの女房など、
さまざまいみじう世のゝしりたり。女御代の
御ことなど、よのいみじき大事なり。かくて
御禊になりぬれば、東三条のきたおもての
ついひぢくづして、おほんさじきせさせ給
て、みやたちも御らんず。そのほどのぎしきあ
りさま、えもいはずめでたきに、ひとつ御
こしにてみやおはします。みやの女房かたの



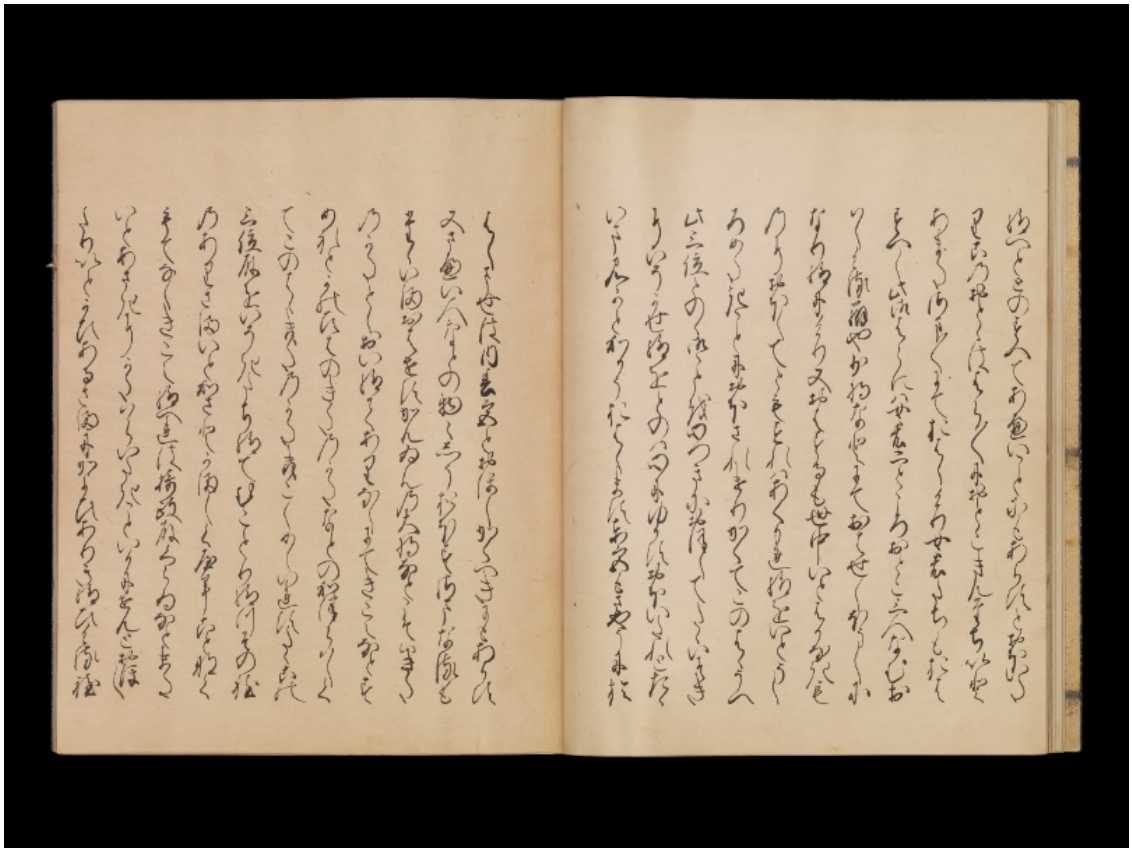
くるま廿、又内のくるま十、女御代の
御くるまなど、そへてえもいはぬことゞもは、
まねびつくすべくもあらず。つねのことなれば
をしはかるべし。ことゞもはつる程に、摂政殿
おはします。御随身ども、いはんかたなくつき
づきしきさまにてうちいでたるに、又御前
の人々など、やむごとなくきらゝかなるかぎり
をえらせ給へり。あなめでたとみえさせ給
に、東三条の御さじきのみすのかたはしをし
あげさせ給て、四のみやいろいろの御ぞどもに、
こき御ぞなどのうへに、をりもの御なをし
を奉りて、みすのかたそばより
さしいでさせ給て、「や、おとゞこそ」と
申させ給へば、摂政殿「あな、まさ
な」と申させ給て、いとう
つくしうみたて
まつらせ給ひて
うちゑませ給へる程
すゞろに見奉る人
いとゑましうおも
ひ奉るべし。



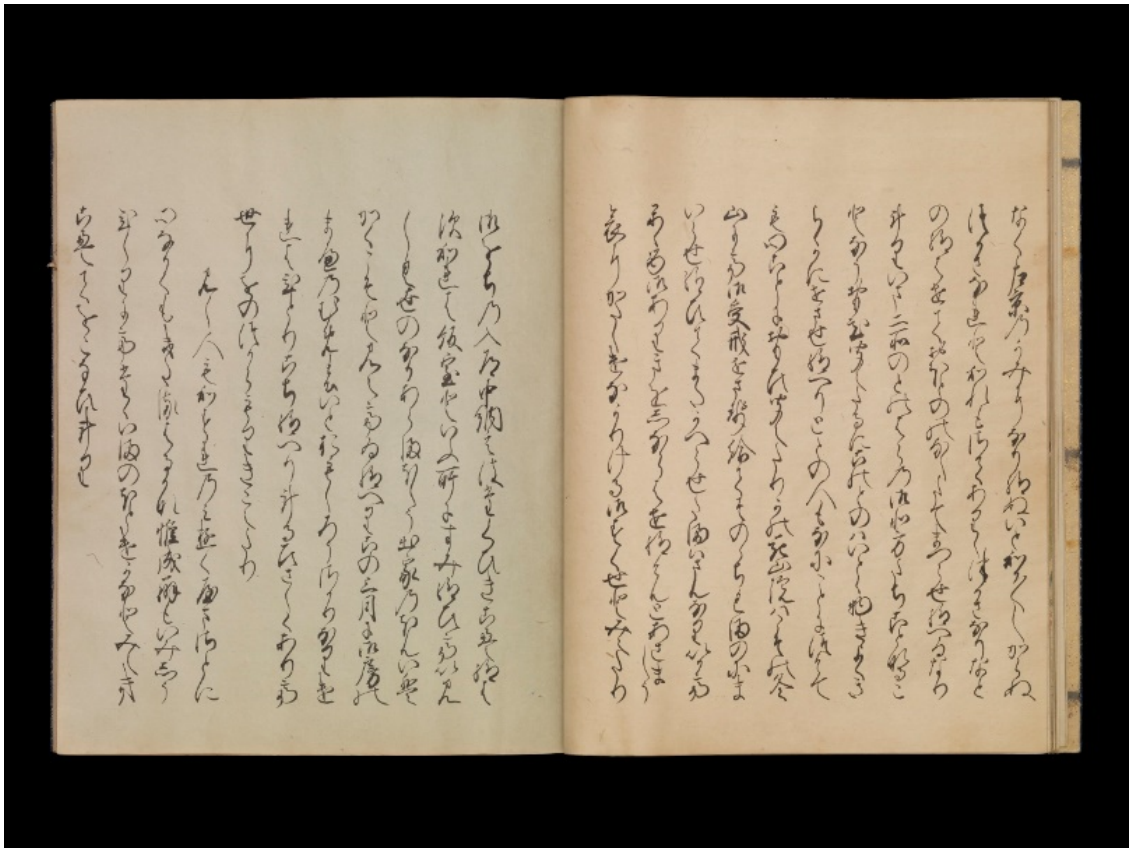
さてその日もくれぬれば、大嘗會の御い
そぎぞあるべき。東宮の御元服十月とあ
りつれど、かやうにさしあひたる御いそぎ
どもにて、十二月ばかりにとおぼしめし
たり。はかなう十一月にもなりぬれば、大じょう
ゑのことゞもいそぎたちて、いと世中こゝろあ
はたゞしう、とばりあげ、なにくれのさほう
のことゞも、いとさはがしうおどろおどろしうて、
五せつもことしいまめかしさまさるべし。
かやうにてすぎもていきて、十二月のつい
たちごろに、東宮御元服ありて、やがて内侍
のかみまいり給、麗景殿にすませ給。みや
いとわかうおはします。かんのとのは十五ばかり
にぞなり給。大とのゝおほんむすめにおはし
ませば、やがて御てぐるま、女御やなど、あべき
かぎりいとものものしうおぼしかしづきた
てまつり給も、たいの御かたのさいはいめで
たくみえたり。まこと、九条殿の十一郎君、宮をぎ
みと聞えし人、此頃中納言にて東宮権大夫にて
おはす。はかなくとしもかへりぬ。きさいの宮、東三条の
院におはしませば、正月二日行幸あり。いといみじう
めでたうて、宮づかさ、とのゝ家司など、加階しよろ



こびしのゝしる。つごもりになりぬれば、つかさに、中納言殿は大納言になり給ぬ。宰相殿は中納言になり給ぬ。ことしは年号かはりて永延元年といふ。二月はれいの神わざどもしきりて、所々のつかひたち、なにくれなどいふ程にすぎぬ。三月は石清水の行幸あるべければ、いみじういそがせ給。行事、この権中納言殿せさせ給。御くらゐまさらせ給べきにやとみえたり。みや、れいのひとつ御こしにておはしませば、いとおほん有さまところせきまでよそほし。かゝるほどに、三位中将殿、土御門の源氏の左大臣どのゝ、おほんむすめふた所、むかひばらにいみじくかしづき奉りて、きさきがねとおぼし聞え給を、いかなるたよりにか、此三位殿、この姫君をいかでと、心ふかう思ひきこえ給て、けしきだち聞え給けり。されどおとゞ、「あな物ぐるをし。ことのほかや。たれか、たゞ今さやうにくちはきゝばみたるぬしたち、いだしいれてはみむとする」とて、ゆめにきこしめしいれぬを、はゝうへれいの女にに給はず、いとこゝろかしこくかどかどしくおはして、「などてか、たゞこの君をむこにて見ざらん。ときどきものみなどにいでゝみるに、此きみたゞならず見ゆるきみなり。たゞわれにまかせ給へれかし。このことあしうや有ける」ときこえ



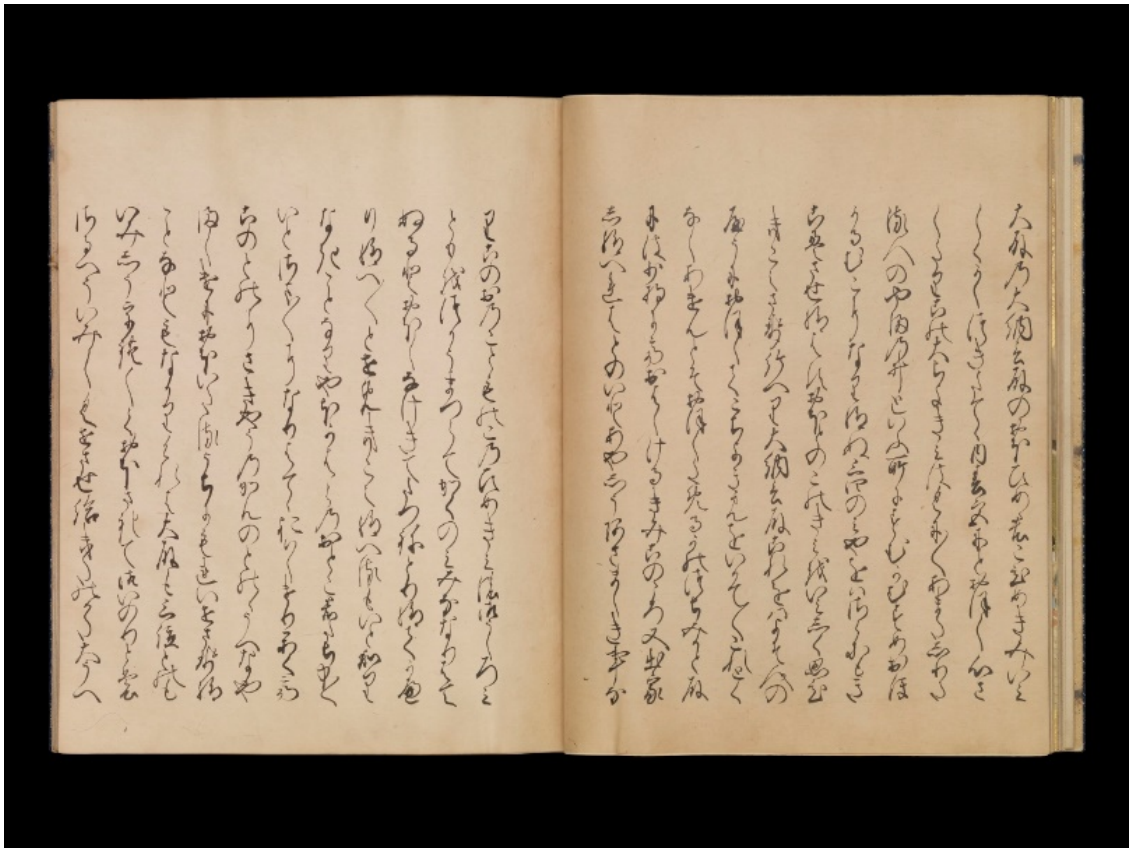
給へと、との、すべてあべいことにもあらずとおぼいたり。このおとゞは、はらばらにおとこきんだちいとあまたさまざまにておはしけり。女君たちもおはすべし。此御はらには、女君二ところ、おとこ三人なむおはしける。弁や少将などにておはせし、ほうしになり給にけり。又おはするも、世中いとはかなきものにおぼして、ともすればあくがれ給を、いとうしろめたきことにおぼされけり。かくてこのはゝうへ、此三位どのゝ御ことを心づきにおぼして、たゞいそぎにいうがせ給を、とのは心にゆかずおぼいたれど、たゞいまみかどわかうおはします、東宮もさやうにおはしませば、内、春宮とおぼしかくべきにもあらず。又、さべい人などの、物々しうおぼすさまなるも、たゞいまおはせず。かんゐんの大将などこそは、きたのかたとしおい給て、ありなしにてきこえなどすめれど、かのびはのきたのかたなどのわづらはしくて、このはゝきたのかたきこしめしいれず。たゞこの三位殿を、いそぎたち給てむこどり給つ。その程のありさま、いとわざとがましくやむごとなくもてなしきこえ給へれば、摂政殿、くらゐなどまだいとあさきに、かたはらいたきこと、いかにせんと、おぼしたり。いとかひあるさまにかよひありき給ひける程



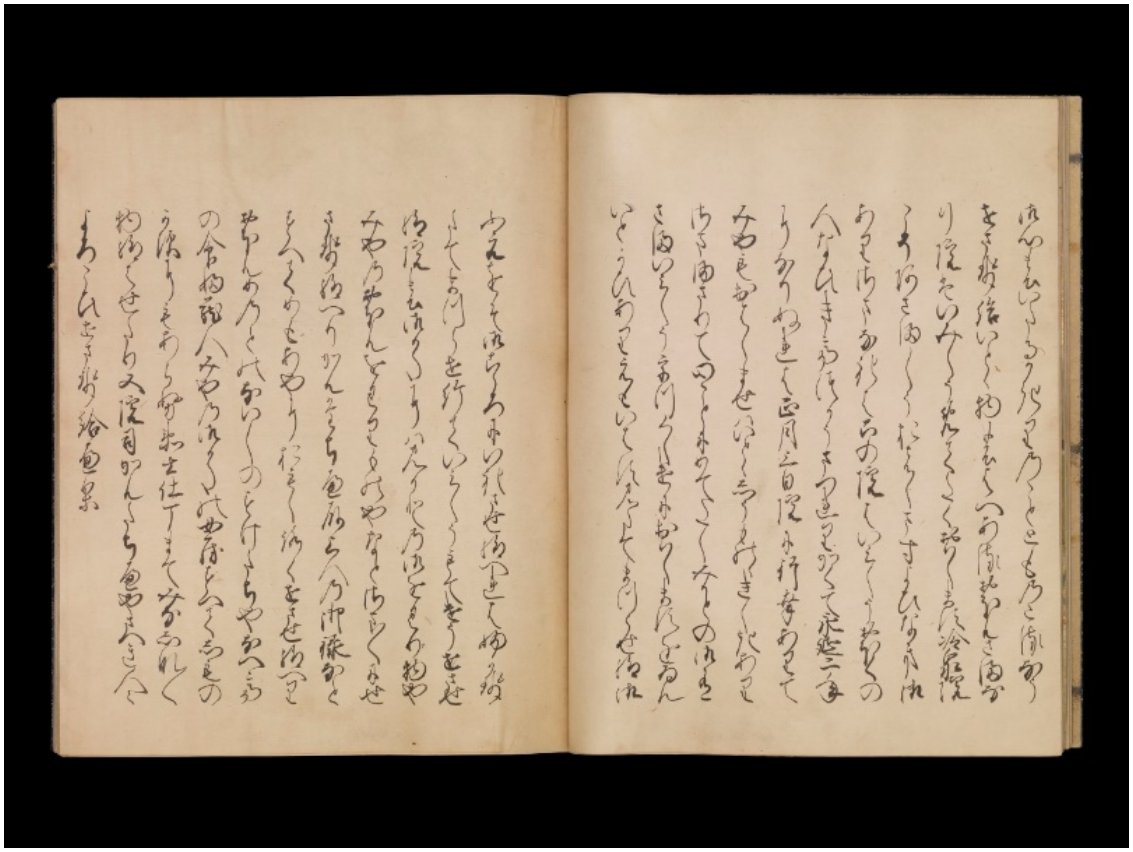
なく、左京のかみになり給ぬ。いとわかわかしからぬつかさなれど、「われもさてありしつかさなり」などの給はせて、おほとののなしたてまつらせ給へるなりけり。いま二所のとのばらの御北方たち、ことなることなうおもひ聞えたるに、このとのはいとゞ物きよくきらゝかにせさせ給へりと、との人もなにごとにつけても心ことにおもひ聞えたり。この花山院は、こぞの冬、山にて御受戒せさせ給せさせ給て、そのゝちくまのにまいらせ給ひて、まだかへらせたまはざんなり。いかでかゝる御ありきをしならはせ給けんと、あさましう哀にかたじけなかりける御すくせとみえたり。

御をぢの入道中納言はたぐひきこえ給はず、われは飯室といふ所にすみ給ひて、いみじく世のなかあらまほしう、出家のほんいはかくこそとみえてゐ給へり。この三月に、御房のまへのむめの、いとおもしろうさかりなりければ、ひとりごち給へりける、ひさしくありて世にをのづからもりきこえたり、

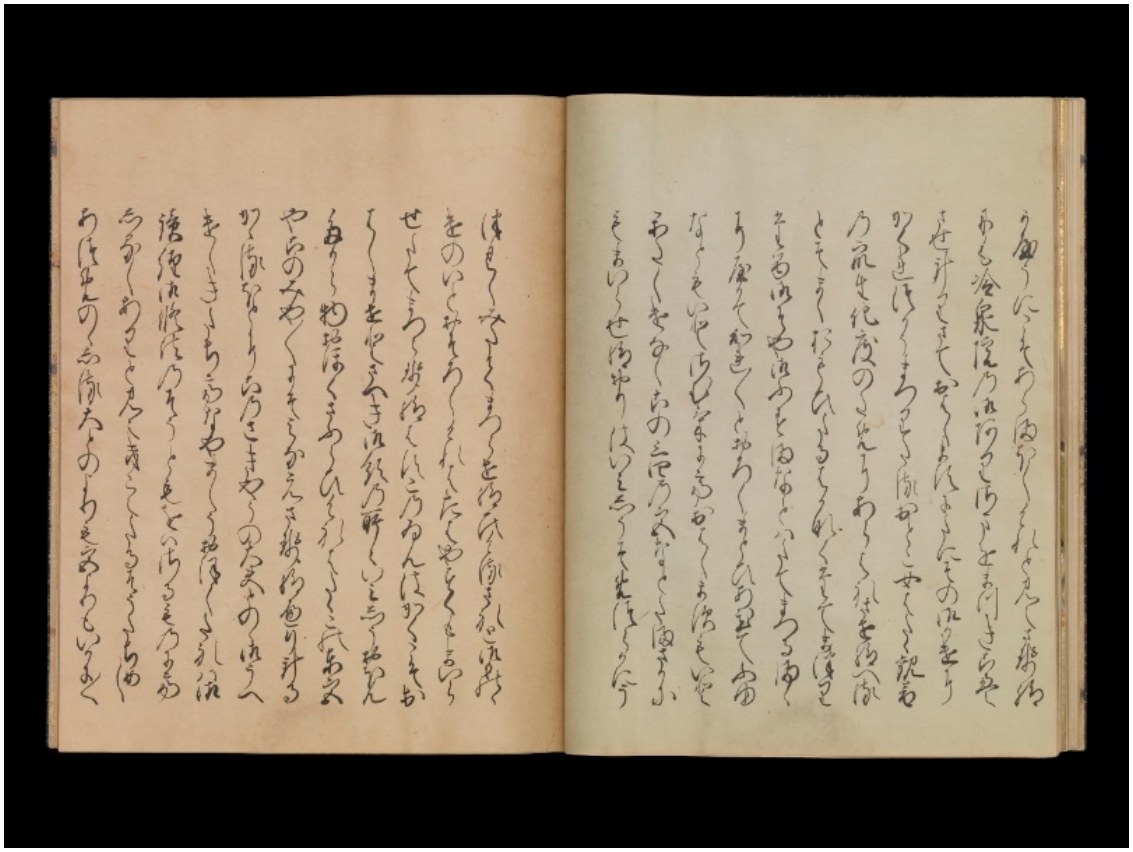
見し人もわすれのみゆくやまざとに
心ながくもきたるはるかな　惟成弁もいみじう
ひじりにて、たゞいまのほとけかなとみえき
こえてをこなひけり。



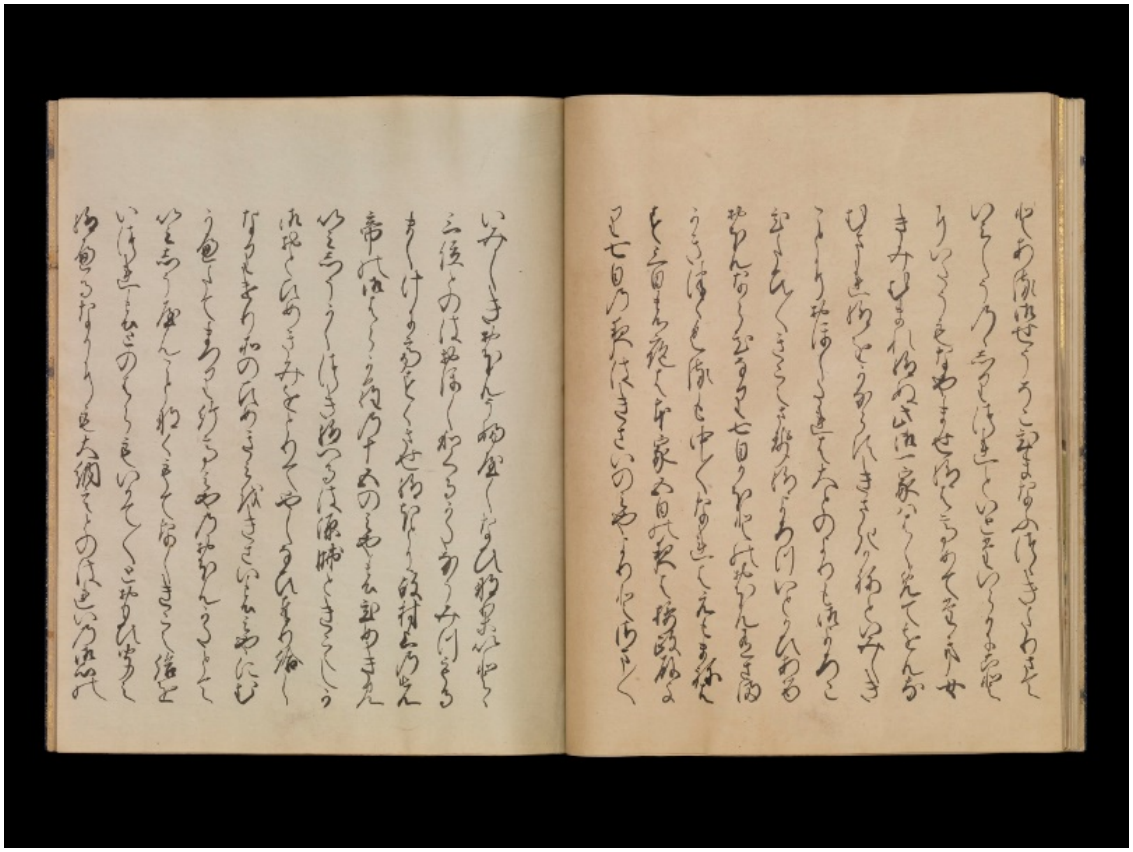
大殿の大納言殿の、おほひめ君、こひめぎみ、いみじくかしづきたてゝ、内、春宮にとおぼし心ざしたり。この大ちよぎみは、くにぐにあまたしりたる人のやまのいといふ所にすむが、むすめおほかる、むこにあり給ぬ。三、四のみやをばさらにもきこえさせ給はず、おほとの、このきみをいみじく思ひきこえさせ給へり。大納言殿、これをばよその人のやうにおぼして、こちよぎみを、いかでいかでこれとくなしあげんとぞおぼしためる。かのつちみかど殿には、少将にておはしけるきみ、このごろ又出家し給へれば、との、いとあやしうあさましき事なり、このおのこどもの、このひめぎみの御うしろみどもをつかうまつらで、かくのみみななりはてぬると、おぼしなげきて、たづねとり給て、「かへり給へかへり給へ」とせめきこえ給へるもいとわりなきことなりや。ほかばらのおとこ君たち、中々いとさまざまになりはてゝおはしけり。かくてこのとのに、さきやうのかんのとのゝうへ、なやましげにおぼいたるうちにも、れいせさせ給ことなどもなかりければ、大殿も、三位どのもいみじううれしくおぼされて、御いのりどもさるべういみじくせさせ給。きたのかた、大うへ、



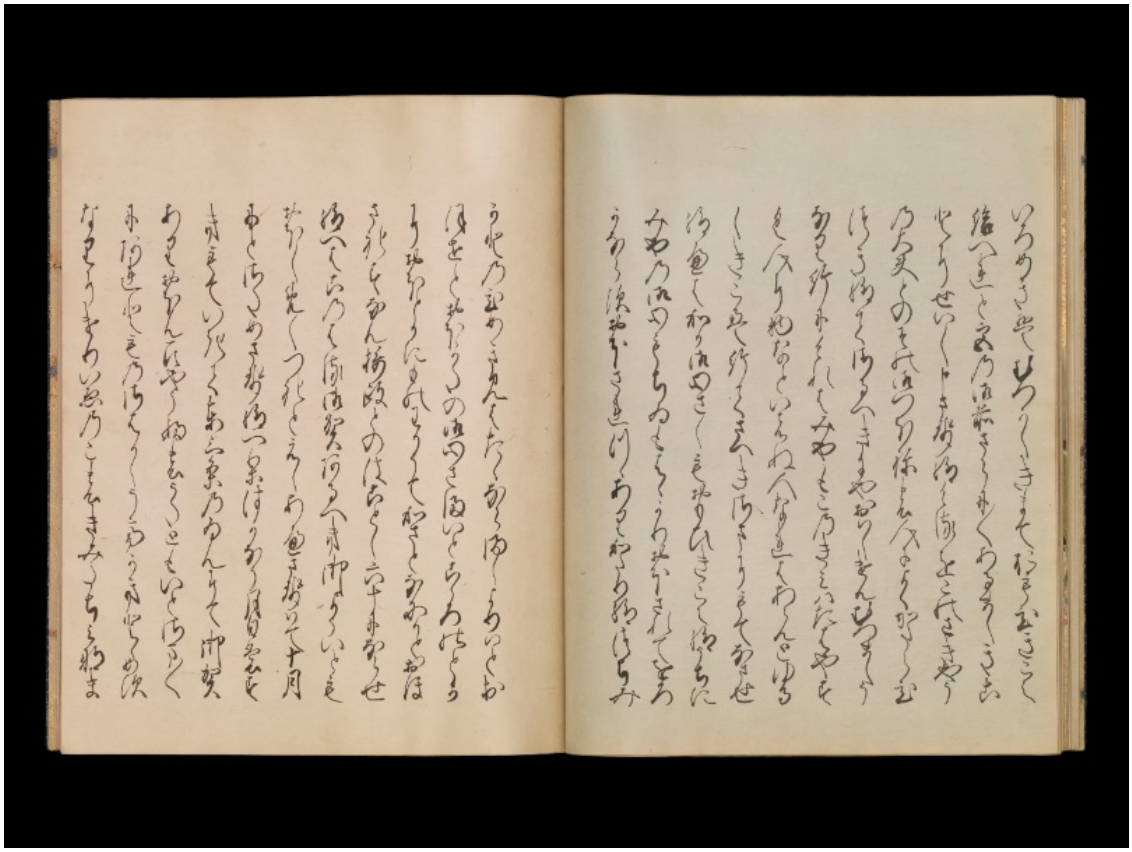
御心のいたるかぎりのことども、のこるなう
せさせ給。いとゞ物のはへあるおほんさまな
り。院はいみじうめでたくおはします。冷泉院
こそ、あさましう、おはしますよひなき御
ありさまなれば、この院はいみじうおほくの
人なびきてつかうまつれり。かくて永延二年
になりぬれば、正月三日院に行幸ありて、
みやもおはしませば、いとゞしうものゝぎしきあり
さままさりて、心ことにめでたし。みかどの御有
さまいみじううつくしげにおはしますを、ゐん
いとかひあり、えもいはず見たてまつらせ給。御
ふえをぞ御こゝろにいれさせ給へれば、ふかせ
たてまつらせ給て、いみじうもてけうぜさせ
給。院の御かたには、みかどの御をくり物や
みやのおほんをくりものやなど、さまざまにせ
させ給へり。かんだちべ、殿上人の御禄など、
すべてめもあやにおもしろくせさせ給へり。
おほんめのとのないしのすけたちや、なべて
の命婦、蔵人、みやの御かたの女房、すべてしもの
かずにもあらぬ衛士、仕丁まで、みなしなじな
物給はせたり。又院司、かんだちべや、さべき人々
よろこびせさせ給へり。



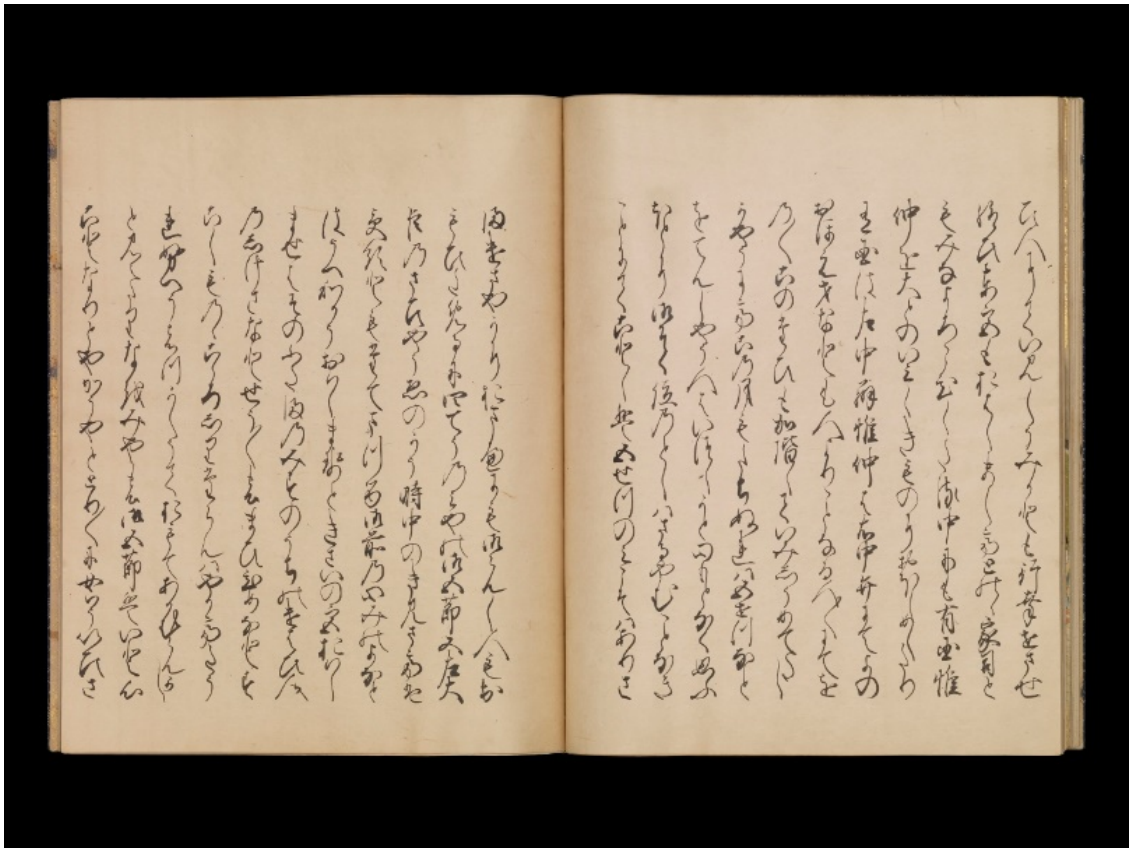
かやうにこそあらまほしけれとみえさせ給
にも、冷泉院の御ありさまをまづきこえ
させけり。さておはしますにだに、その御かげに
かくれつかうまつりたるおとこ女は、たゞ、「観音
の、衆生化度のためにあわはれさせ給へる」
とぞましおもひたる。はかなくたてまつり
たる御ぞや御ふすまなどは、たてまつるまゝ
に、やがてわれわれとおろしまどひあひて、ふゆ
などもいとさむげにておはしますもいと
かたじけなし。この三、四の宮など、たまさかに
もまいらせ給おりは、いみじうぞめづらかにう
つくしみたてまつらせ給ひける。されど御ものゝ
けのいとおそろしければ、たはやすくもまいら
せたてまつらせ給はず。このゐんはかくこそお
はしませど、さべき御領の所々いみじうおほん
たから物おほくさぶらひければ、たゞこの東宮
やこのみやみやにぞみなえさせ給へりける。
かゝるほどに、このさきやうの大夫どのゝ御うへ、
けしきだちてなやましうおぼしたれば、御
読経、御修法のそうどもをばさるものにて、
しるしありと見えきこえたるそうたちめし
あつめのゝしる。大とのよりも宮よりも、いかにいかに



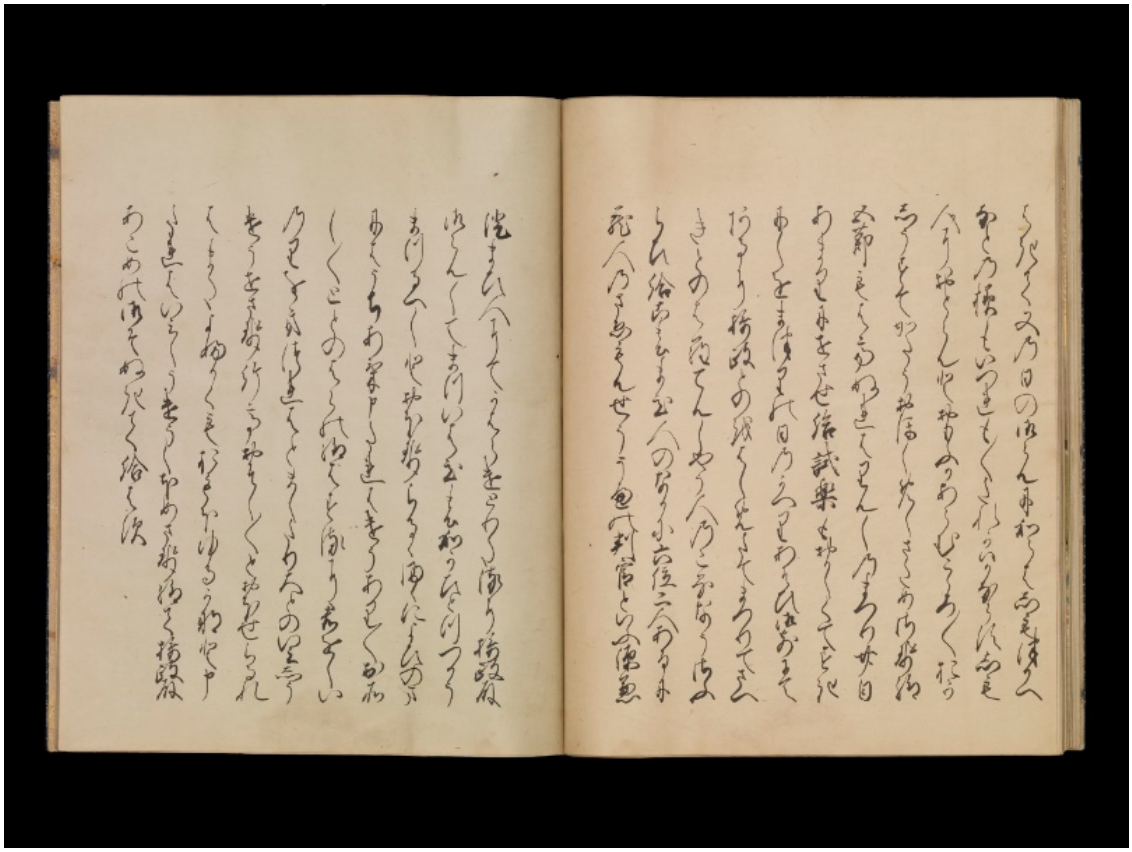
とある御せうそこひまなふつゞきたり。さて
いみじうのゝしりつれど、いとたいらかに、こと
にいたうもなやませ給はで、めでたき女
ぎみむまれ給ぬ。此御一家は、はじめてをんな
むまれ給をかならずきさきがねといみじき
ことにおぼしたれば、大とのよりも御よろこ
びたびたびきこえさせ給。よろづいとかひある
おほんならひなり。七日がほどのおほん有さま、
かきつゞくるも中々なれば、えもまねば
ず。三日の夜は本家、五日のよるは摂政殿よ
り、七日の夜はきさいのみやよりと、さまざま
いみじきおほんうぶやしなひなり。いとゞ
三位どのはおぼしわくるかたなう、みづもる
まじげにてすぐさせ給ほどに、故村上の先
帝の御はらからの十五のみやのひめぎみ、
いみじうかしづき給へるは、源帥ときこえしが
御おとひめぎみをとりてやしなひ奉り給し
なりけり。そのひめぎみをきさいのみやにむ
かへたてまつり給て、みやのおほんかたとて、
いみじうやんごとなくもてなしきこえ給を、
いづれのとのばらも、いかでいかでとおもひ聞え
給へるなかにも、大納言どのは、れいの御心の



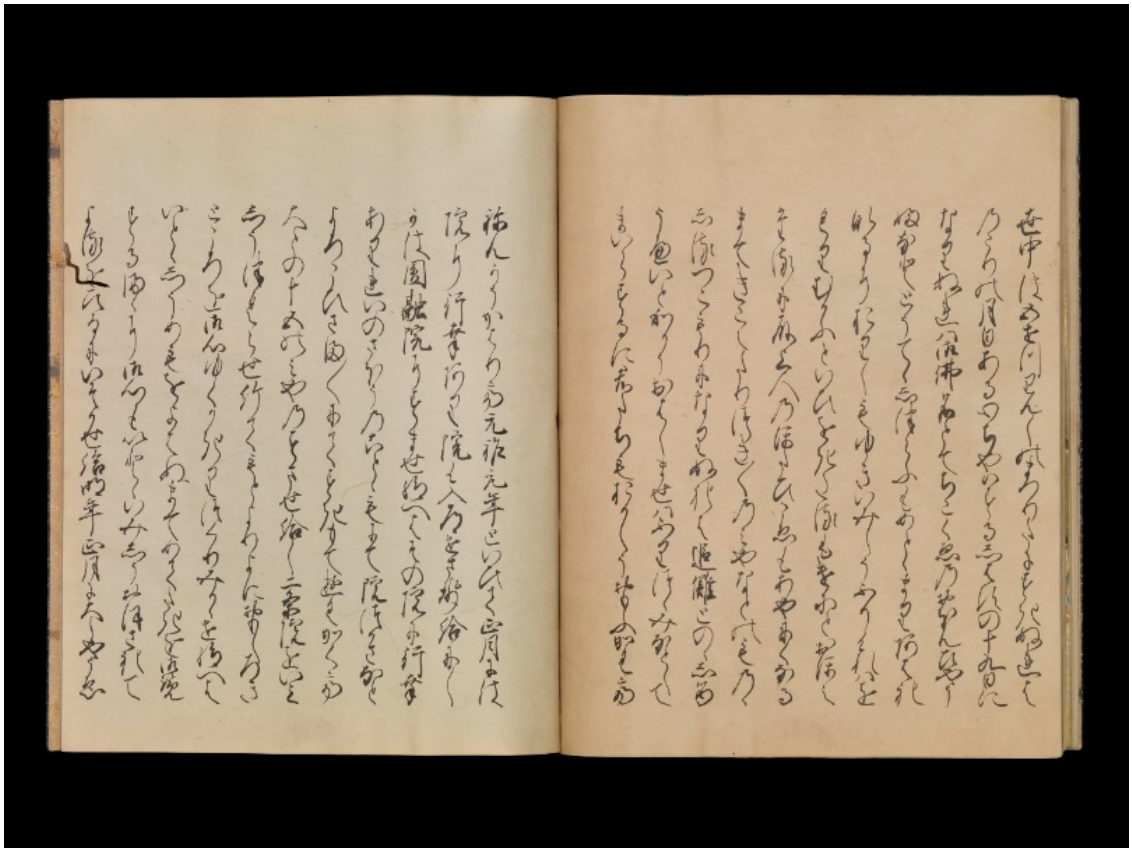
いろめきはむつかしきまでおもひきこえ
給へれど、宮の御前さらにさらにあるまじきこ
とにせいし申させ給けるを、このさきやう
の大夫どの、その御つぼねの人によくかたらひ
つき給て、さるべきにおはしけん、むつまじう
なり給にければ、みやも、「このきみはたはやす
く人に物などいはぬ人なればあらん」とゆる
しきこえ給て、さべきさまにもてなさせ
給へば、わが御心ざしもおもひきこえ給うちに、
みやの御心もちゐもはゞかりおぼされて、をろ
かならずおぼされつゝありわたり給。つちみ
かどのひめぎみは、たゞならましよりはとお
ぼせど、おほかたの御心ざまいとこゝろのどか
に、おほどかに、ものわかうて、わざとなにかとおぼ
されずなん。摂政どのはことし六十にならせ
給へば、このはる御賀あるべき御よういども
おぼしめしつれど、えしあへさせはで、十月
にとさだめさせ給へり。はかなう月日もす
ぎもていきて、東三条のゐんにて御賀
あり。おほんびやうぶのうたども、いとさまざま
にあれど、ものさはがしうてかきとゞめず
なりにけり。いゑのこのきみたちみなま



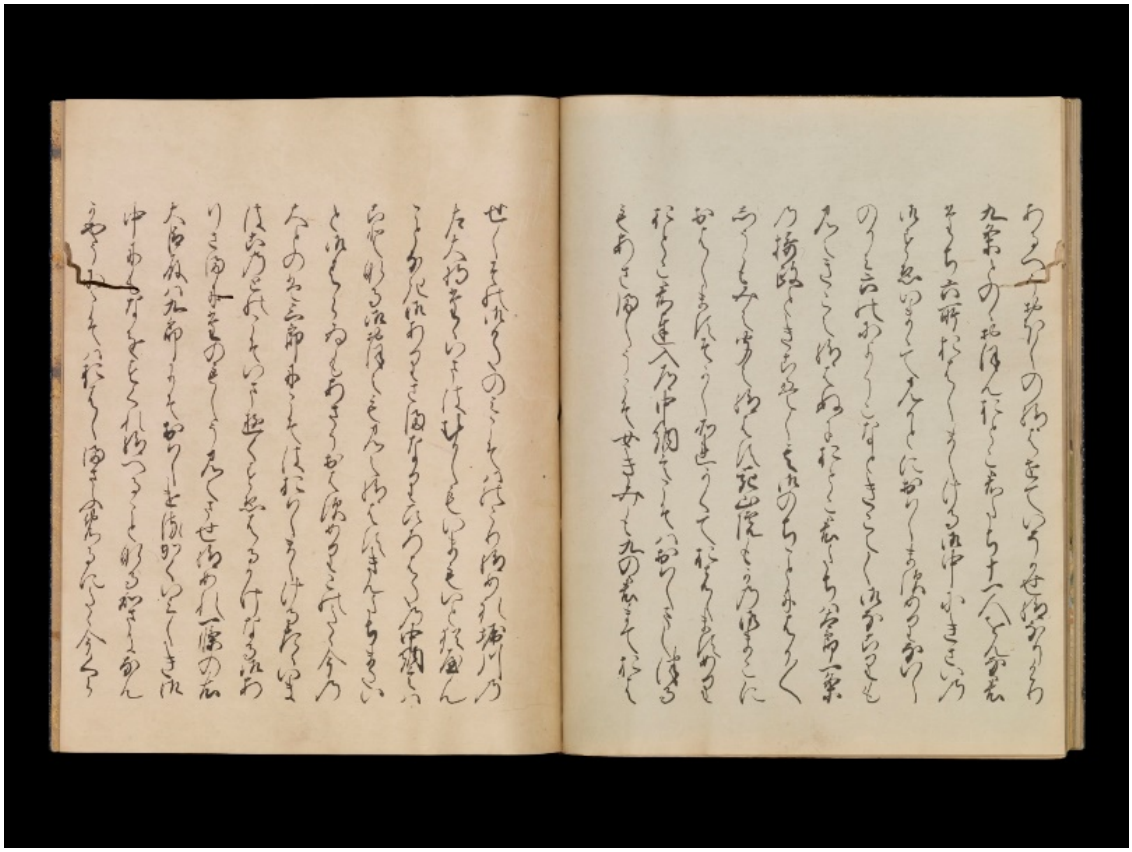
ひ人にて、いみじう。みかども行幸せさせ
給ひ、東宮もおはしまして、とのゝ家司ど
もみなよろこびしたる中にも、有国惟
仲を大とのいみじきものにおぼしめしたり。
有国は左中弁、惟仲は右中弁にて、よの
おぼえ、才なども、人よりことなる人々にて、を
のをのこのたびも加階していみじうめでたし。
かやうにてこの月もたちぬれば、五せつなど
を、てんじやう人はいつしかと心もとなく思ふ
ほどに御そく位のとしはさるやむことなき
ことにて、ことしは五せつのみこそはありさ
まけざやかにおまへにも御らんじ、人もお
もひためるに、四でうのみやの御五節、又左大
臣のさひやうゑのかう時中のきみ、さては
受給どもたてまつる。御前の心みのよなど
は、うへわかうおはしませど、きさいの宮おはし
ませば、そのふたまのみすのうちのけはひ、人
のしげさなど、せうせうのまひひめなど、す
こしものゝこゝろしりたらんは、やがてたう
れぬべうはづかしうて、おもてあかむらんかし
と見えたり。なをみやの御五節はいと心
ことなり。とやかうやと、とりどりに女ばういひさ



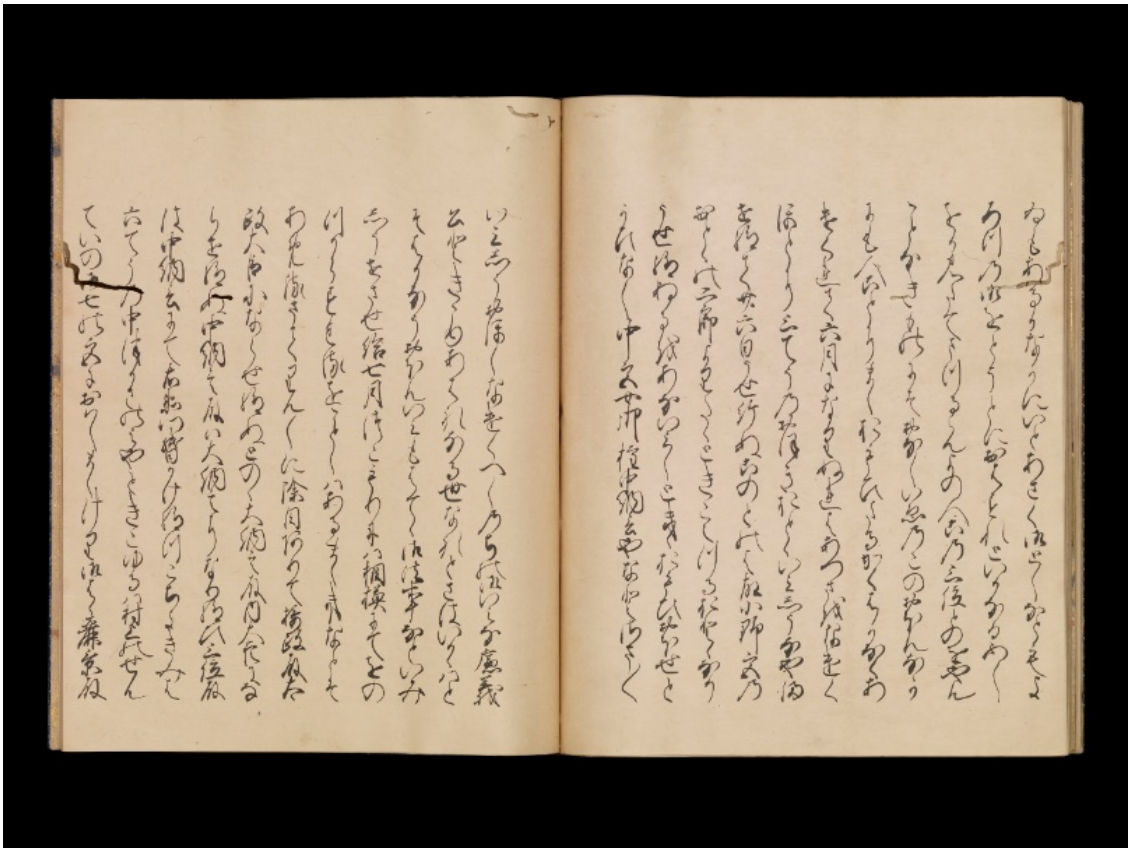
はぎて、又の日の御らんに、わらは、しもづかへ
などの様も、いづれもいづれもたれかはかならずしも
人におとらんとおもふがあらむ、こゝろこゝろおか
しうすてがたうおぼしめしさだめさせ給。
五節もはてぬれば、りんじのまつり、廿日
あまりにせさせ給。試楽もおかしくてすぎ
にしを、まつりの日のかへりあそび御前にて
あるに、摂政どのをはじめたてまつりて、さべ
きとのばら、てんじやう人のこるなうさぶ
らひ給。このまひ人のなかに、六位二人あるに、
蔵人のさゑもんせううへの判官といふ源兼
澄、まひ人にてかはらけとりたるに、摂政殿
御らんじて、「まづいはひのわかひとつつかう
まつるべし」とおほせらるゝまゝに、「よひのま
には」うちあけ申たれば、「けうありけうあり、おそ
しおそし」ととのばらの給はするに、「君をしい
のりをきつれば」とましたり。大とのいみじう
けうぜさせ給て、「おそしおそし」とおほせらるれ
ば、まだよふかくもおもほゆるかな」と申
たれば、いみじうけうじほめさせ給て、摂政殿
あこめの御ぞぬぎて給はす。



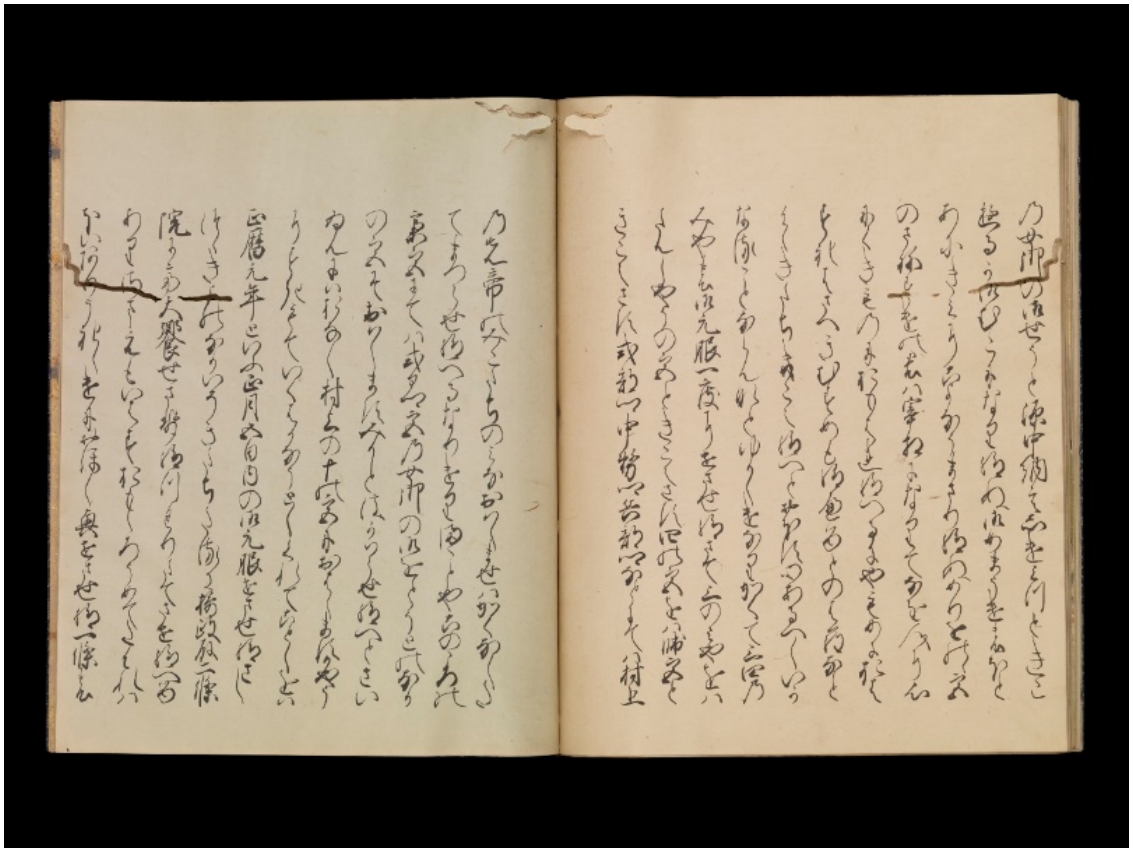
世中は五せつ、りんじのまつりだにすぎぬれば、のこりの月日ある心ちやはする。しはすの十九日になりぬれば、御仏名とて、ぢごくゑのおほんびやうぶなどとうでゝしつらふも、めとゞまりあはれなるに、おりしもゆきいみじうふりければ、「をくりむかふ」といひをきたるもげにとおぼえたるに、殿上人のぼだひごゑもあやにくなるまできこえたり。つぎつぎのみやなどのものゝしる。つごもりになりぬれば、追儺とのゝしる。うへいとわかうおはしませば、ふりつゞみなどしてまいらするに、君だちもおかしうおもふ。かくてねんがうかはりて、元（永）祚元年といひて、正月には院に行幸あり。院も入道せさせ給にしかば、円融院にすませ給へば、その院に行幸あり。れいのさほうのことゞもにて、院つかさなど、よろこびさまざまにて、すぎもてゆく。かくて大との、十五のみやのすませ給し二条院をいみじうつくらせ給て、もとよりよにおもしろきところを、御心ゆくかぎりつくりみがゝせ給へば、いとゞしうめもをよばぬまでめでたきを御覧ずるまゝに、御心もいとゞいみじうおぼされて、よるをひるにいそがせ給。明年正月に大じようゑ



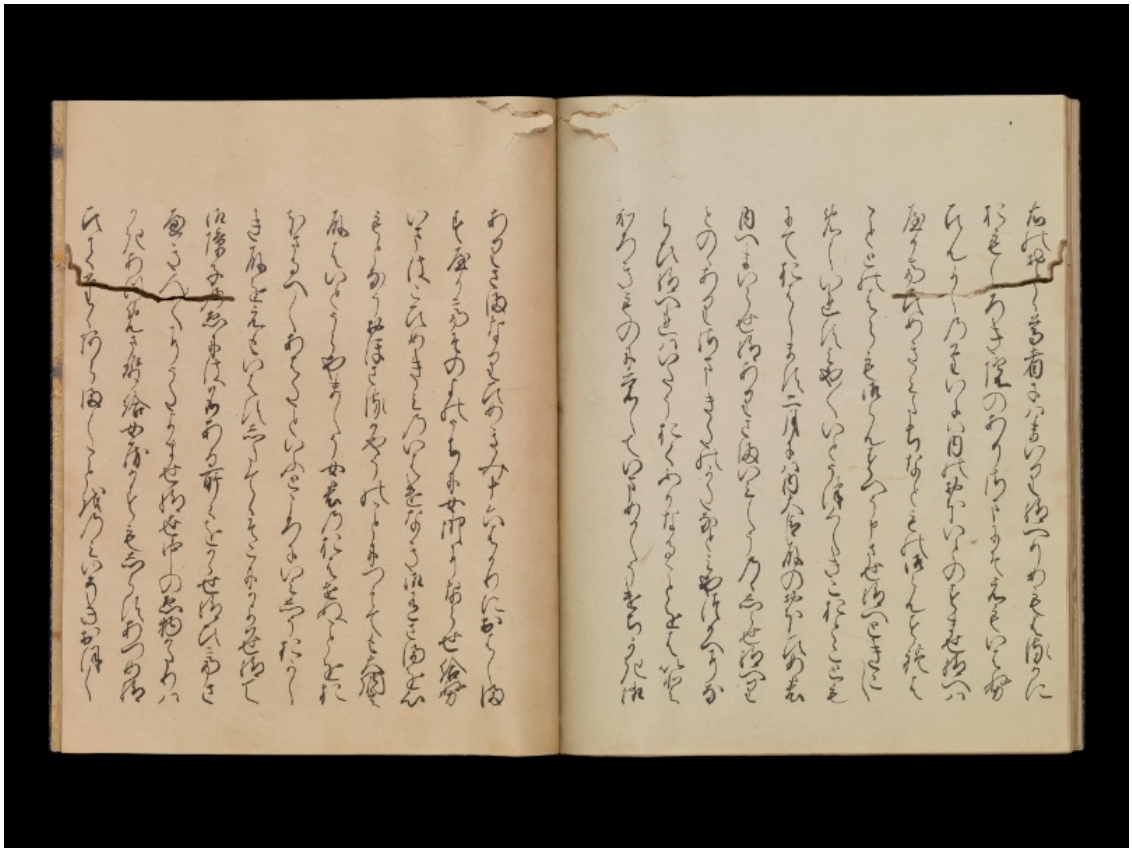
あるべうおぼしの給はせて、いそがせ給なりけり。
九条どのゝおほんおとこ君たち十一人をんな君
たち六所おはしましける御中に、きさいの
御すゑいまゝでみかどにおはしますめり。ないし
のかみ、六のにょうごなどきこえし、御なごりも
見えきこえ給はぬに、おとこ君たちは、太郎、一条
の摂政ときこえし、其御のちことにはかばか
しうもみえ聞え給はず。花山院もかの御まごに
おはしますぞかし。それかくておはしますめり。
おとこ君達入道中納言こそはおはしましつる
もあさましうこそ。女ぎみも、九の君までおは
せし、その御かたのみこそはのこり給めれ。堀川の
左大将、たゞいまはむかしもいまもいと猶やん
ごとなき御ありさまなり。ひろはたの中納言は
ことなる御おぼえも見え給はず。きんだち、まだい
と御くらゐもあさうおはすめり。このたゞ今の
大とのは、三郎にこそはおはしましける。たゞいま
はこのとのこそ、いまゆくすゑはるかげなる御あ
りさまに、たのもしう見えさせ給めれ。一条の右
大臣殿は、九郎にぞおはしける、かくいみじき御
中にも、なをすぐれ給へることなるわざになん。
かやうにこそはおはしまさふめるに、たゞ今くら



ゐもあるが、なかにいとあさく、御としなどもよろづの御をとうとにおはすれど、いかなるふしをか見たてまつるらん、よの人、この三位どのをやんごとなきものにぞ、おなじいゑのこのおほんなかにも、人ごとにましおもひたる。かくはかなくあけくれて、六月になりぬれば、あつさをなげくほどに、三でうのおほきおとゞいみじうなやませ給て、廿六日うせ給ぬ。このとのは、故小野宮のおとゞの二郎よりたゞときこえつるおとゞなり。うせ給ぬるを、あないみじと、きゝおもひおぼせどかひなし。中宮、女御、権中納言やなど、さまざまいみじうおぼしなげくべし。のちの御いみな廉義公ときこゆ。あはれなる世なれど、さはいかゞはとぞ。はかなうおほんいみもはてゝ、御法事などいみじうせさせ給。七月つごもりには相模（撲）にてをのづからすぐるを、ことしはあるまじきなどぞあめる。さてりんじに徐目ありて、摂政殿、太政大臣にならせ給ぬ。とのゝ大納言殿、内大臣にならせ給ぬ。中納言殿は大納言になり給ひ、三位殿は中納言にて右衛門督かけ給つ。こちよぎみは、六でうの中つかさのみやときこゆるは、村上のせんていの御七の宮におはしましけり、御はゝ、麗景殿

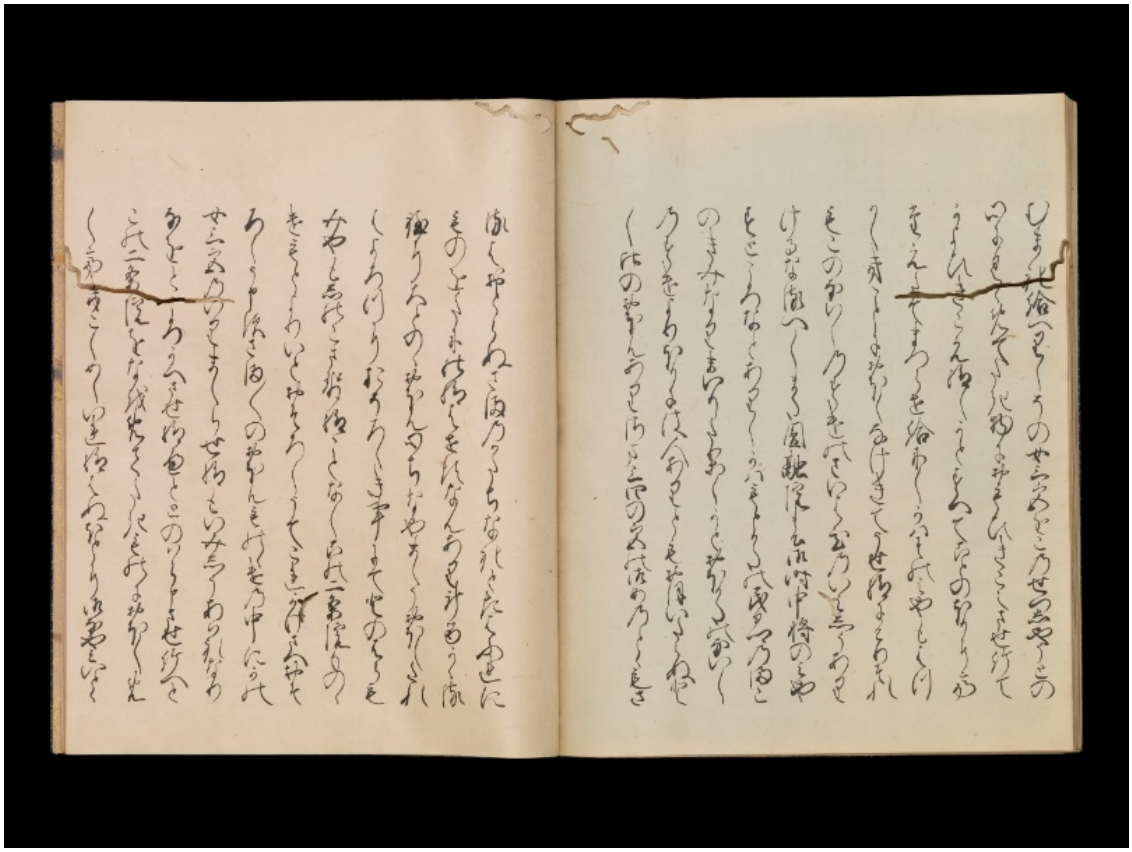


の女御の御せうと、源中納言しげみつときこゆるが御むこになり給ぬ。御めまうけのほど、あにぎみにこよなうまさり給ぬめり。をのゝ宮のさねすけの君は宰相になりて、なを人に心にくきものにおもはれ給へるに、やもめにおはすれば、さべきむすめも給へるとのばらなど、けしきだちきこえ給へど、おぼす心あるべし、いかなることならんなどゆかしげなり。かくて三、四のみやの御元服一度にせさせ給。さて三のみやをばだんじやうの宮ときこえさす。四の宮をば帥宮ときこえさす。式部卿、中務卿、兵部卿などにては、村上の先帝のみこたちのみなおはしませば、かくなしてまつらせ給へるなりけり。まことや、このごろの斎宮にては、式部卿宮の女御の御をとうとのなかの宮ぞおはします。みかどはかはらせ給へど、さいゐんにはおなじ村上の十の宮におはします。かやうにすぎもていく。はかなうとしくれて、ことしをば正暦元年といふ。正月五日、内の御元服せさせ給。さしつゞきよのなか、いそぎたちたるに、摂政殿、二条院にて大饗せさせ給。つくりたてさせ給へるありさま、えもいはずおもしろうめでたければ、ほいあり、うれしげにおぼし興ぜさせ給。一条の

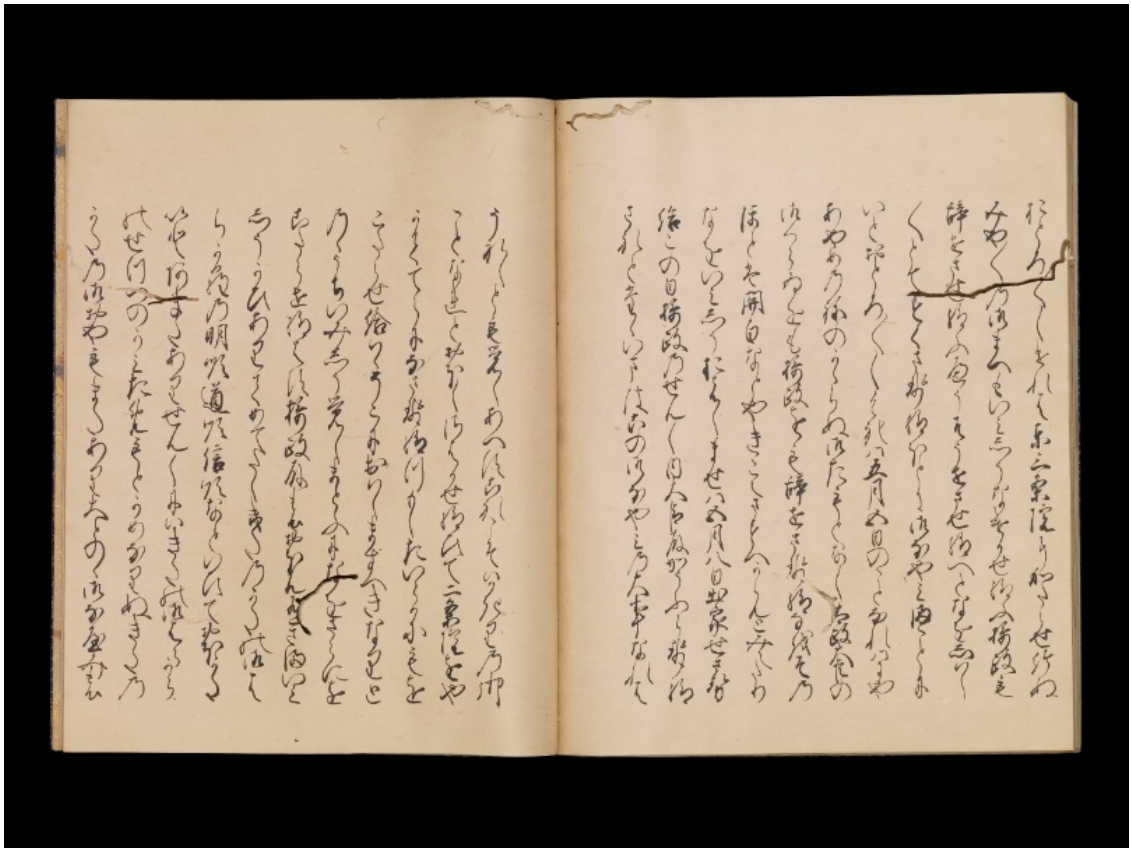


右のおとゞ、尊者にはまいり給へり。めもはるかにおもしろき院のありさまにぞ。えもいはぬひんがしのたいには内のおほいどのすませ給へば、やがてひめぎみたちなどもの御らんずれば、こととのばらも御らんずべう申させ給へど、きこしめしいれず。みやみやいとうつくしきこおとこどもにておはします。二月に内大臣殿のおほひめ君内へまいらせ給ありさま、いみじうのゝしらせ給へり。とのゝありさま、きたのかたなどみやづかへにならひ給へれば、いたうおくぶかなることをばいとわろきものに覚して、いまめかしうけぢかき御ありさまなり。ひめぎみ十六ばかりにおはします。やがてそのよのうちに女御にならせ給ぬ。いまはこひめぎみのいはけなき御有さまを心もとなうおぼさる。かやうのことにつけても、大納言殿はいとうらやましう、女君のおはせぬことをおぼさるべし。あはたといふところにいみじうおかしき殿をえもいはずしたてゝ、そこにかよはせ給て、御障子の忍には名ある所々をかゝせ給ひて、さべき人々にうたよませ給。世中の忍物がたりはかきあつめさせ給、女房、かずもしらずあつめ給ひて、たゞあらましごとをのみいそぎおぼし

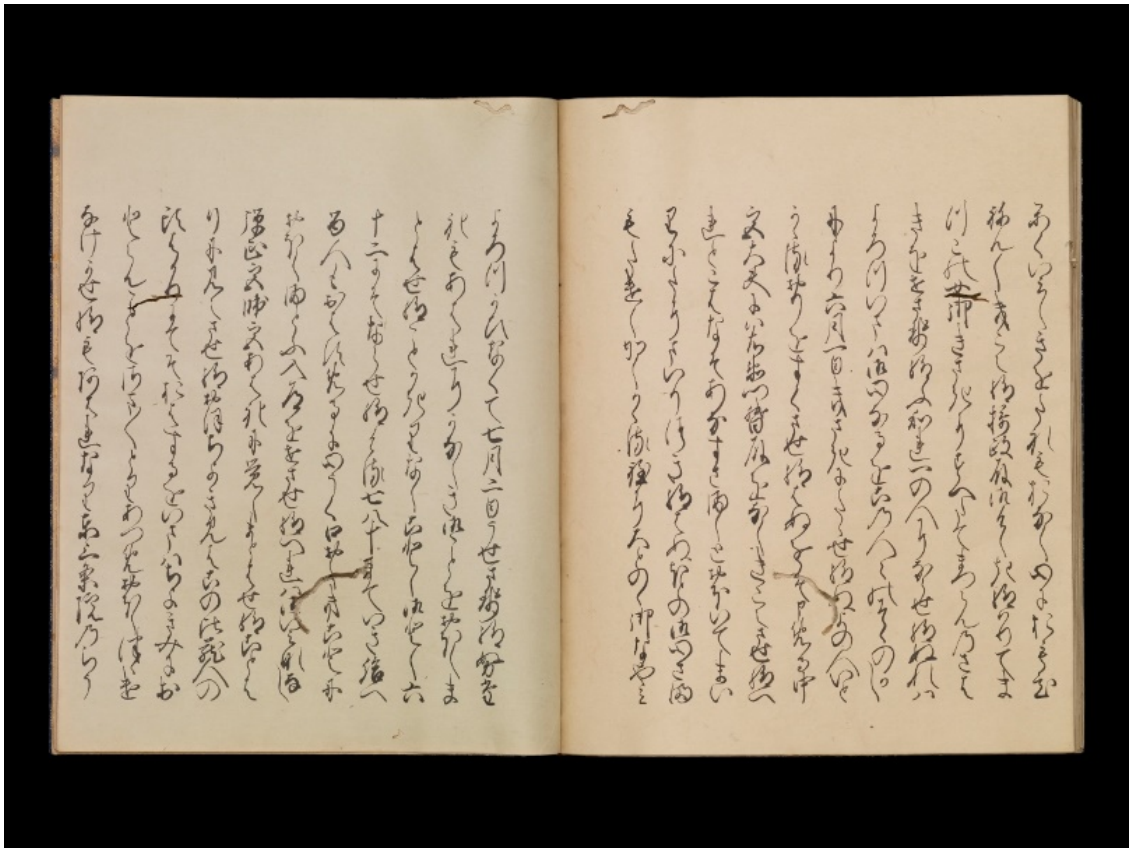
たるも、おかしく見たてまつる。このおとこぎみ
達の御なかのこのかみにおはせし君をばふく
たりぎみと聞えし、をとゝしの八月にわづらひて、
はかなうう せ給にしかば、くちおしきことにお
ぼすべし。いみじうさがなくて、よの人にやすくも
いひおもはれ給はざりしかばにやとぞ、人もき
こえける。内大臣殿のむかひばらの君は、たゞ今四位
少将などにておはす。それも、ふくたり君などの
御やうにいとさがなうおはすれど、これはさすが
にぞ見え給ふ。四郎ぎみはまだちいさくおはす
れど、ほうしになしたてまつらせ給て、小松の僧都
といふ人につけたてまつり給てなん。はらばら
の御君たち、おほちよぎみよりほかに、まだとも
かくもしたてたてまつり給はず。大とのとしごろ
やもめにておはしませば、おほんめしうどの内侍
のすけのおぼえ、年月にそへてたゞごんのきたの
かたにて、世中の人みょうぶし、さてつかさめしの
おりはたゞこのつぼねにあつまる。院女御の
おほんかたに大輔といひし人なり。よの御はじめ
ごろ、かうてひとゝころおはしますあしきことなり
とて、村上の先帝の御女三みやは、あぜちのみやすど
ころときこえし御はらにおとこ三宮、女三宮



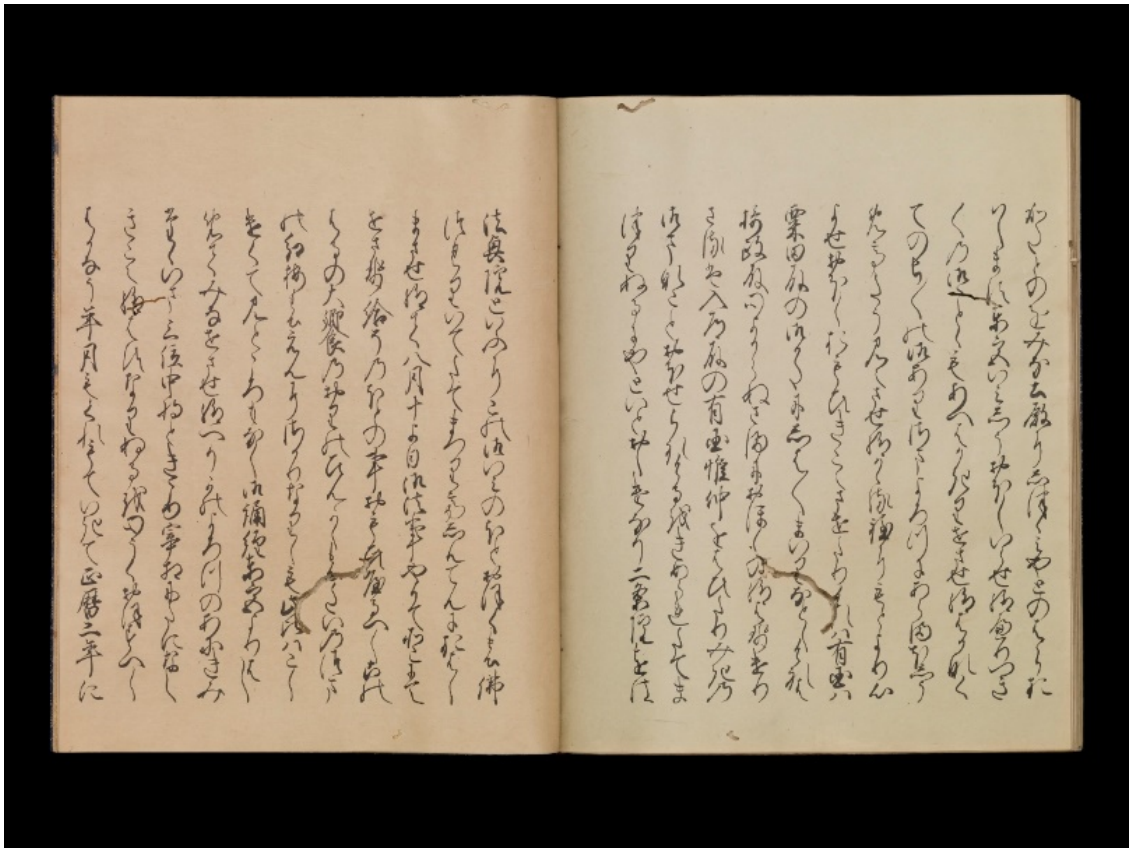
むまれ給へりし、その女三宮を、このせつしやうどの、
心にくゝめでたき物におもひきこえさせ給て、
かよひきこえ給しかど、すべてことのほかにて
たえたてまつらせ給にしかば、そのみやもはづ
かしきことにおぼしなげきてうせ給にけり。それ
もこのないしのすけのさいはひのいみじうあり
けるなるべし。また円融院の御時、中将のみや
すどころなどありしかば、もとかたの民部卿のまご
のきみなり。まいりたりしかど、おほかたのないし
のすけよりほかには人ありともおぼいたらぬと
し頃のおほんありさま、三、四の宮の御めのとゞもさ
るはおとらぬさまのかたちなれど、たはぶれに
ものをだにの給はせずなんありける。かゝる
程に、大とのゝおほん心ちなやましうおぼしたれ
ば、よろづにおそろしき事にて、とのばらも
みやもしのこさせ給ことなし。この二条院、ものゝ
けもとよりいとおそろしうて、これがけさへおそ
ろしう申す。さまざまのおほんものゝけの中に、かの
女三宮のいりまじらせ給も、いみじうあはれなり。
「なをところかへさせ給へ」と、とのばら申させ給へど、
この二条院をなをめでたきものにおぼしめ
して、きこしめしいれ給はぬほどに、御なやみいとゞ



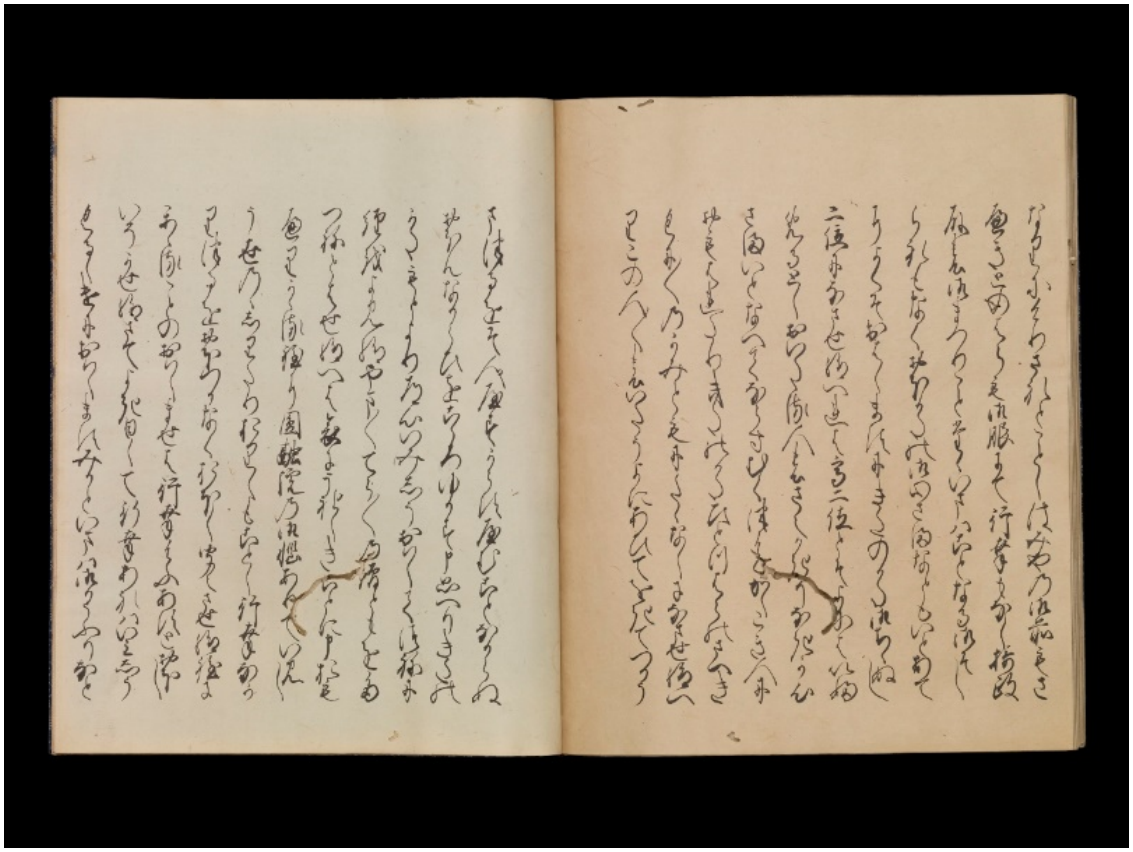
おどろおどろしければ、東三条にわたらせ給ぬ。
みやみやの御まへもいみじうなげかせ給ふ。摂政も
辞せさせ給ふべうそうせさせ給へど、なをしばし、
なをしばしとて、すぐさせ給ほどに、御なやみまことに
いとおどろおどろしければ、五月五日のことなればにや、
あやめのねのかゝらぬ御たもとなし。太政大臣の
御くらゐをも、摂政をも辞せさせ給。なをその
ほどは、関白などやきこえさすべからんとみえたり。
なをいみじうおはしませば、五月八日出家せさせ
給。この日摂政のせんじ、内大臣殿かうぶらせ給。
されどたゞいまはこの御なやみの大事なれば、
うれしとも覚しあへず。これこそはかぎりの御
ことなれとおぼしさはがせ給ひて、二条院をや
がててらになさせ給つ。もしたいらかにもを
こたらせ給はゞ、そこにおはしますべきなり。と
のゝうちいみじう覚しまどふに、なをさらにを
こたらせ給はず。摂政殿のおほん有さまいみ
じうかひありてめでたし。きたのかたの御は
らからの明順、道順、信順などいひて、おほかた
いとあまたあり。せんじには、きたの御はらから
のせつつのかみためもとがめなりぬ。きたの
かたの御おやもまだあり。大とのゝ御なやみの



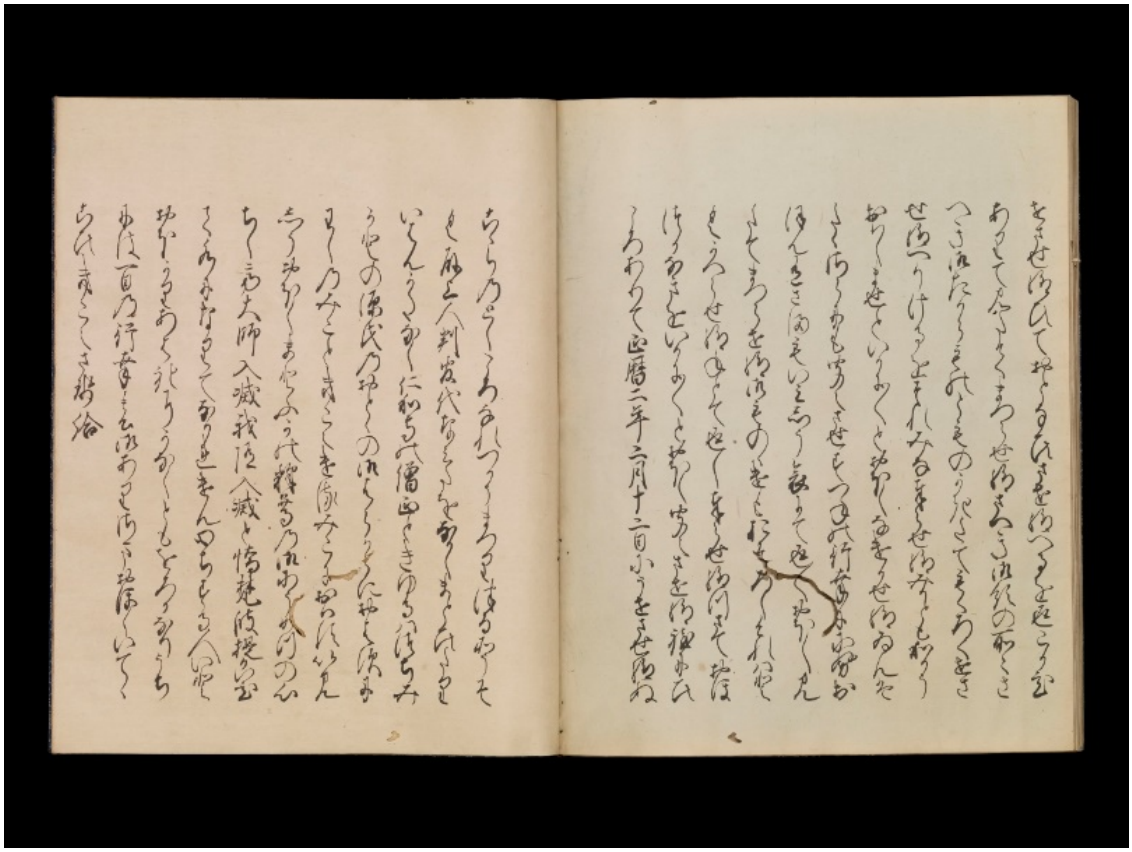
かくいみじきを、たれもおなじ心におもひ
ねんじきこえ給。摂政殿、御けしき給はりて、ま
づこの女御、きさきにすへたてまつらんのさは
ぎをせさせ給ふ。われ一人の人にならせ給ぬれば、
よろづいまは御心なるを、この人々のそゝのかし
により、六月一日きさきにたゝせ給ぬ。よの人いと
かゝるおりをすぐさせ給はぬをぞ申める。中
宮大夫には、右衛門督殿をなしきこえさせ給へ
れど、こはなぞ、あなすさまじとおぼいて、まい
りにだにまいりつき給はぬほどの御心ざま
もたけしかし。かゝる程に、大とのゝ御なやみ、
よろづかひなくて、七月二日うせさせ給ぬ。た
れもあはれにかなしき御ことをおぼしま
どはせ給ことかぎりなし。ことし御とし六
十二にぞならせ給ける。七八十までいき給へ
る人もおはすめるに、心うく口おしきことに
おぼしまどふ。入道をせさせ給へれば、御いみななし
弾正宮、帥宮、あはれに覚しまどはせ給。ことは
りに見えさせ給。おほちよぎみは、この頃蔵人の
頭ばかりにてぞおはするを、いまはちよぎみにお
とらんことを、さまざまとりあつめおぼしつゞけ
なげかせ給もあはれなり。東三条院のらう、



わたどのをみな土殿にしつゝ、みや、とのばらをはします。東宮いみじうおぼしいらせ給へり。つぎつぎの御ことゞもあべはかぎりせさせ給。はかなくて、のちのちの御ありさまよろづにあらまほしうめでたう見えさせ給。かゝる程に、もとより心よせおぼしおもひきこえさせたりければ、有国は、粟田殿の御かたにしばしばまいりなどしければ、摂政殿、心よからぬさまにおぼしの給はせけり。さるは入道殿の、有国、惟仲をばひだりみぎの御まなことおほせられけるを、きめられたてまつりぬるにやと、いとおかしげなり。二条院をば法興院といふに、この御いみのほど、おほくの仏つくりいでたてまつりて、しんでんにおはしまさせ給て、八月十よ日御法事やがてそこにてせさせ給。そのほどの事おもひやるべし。このはるの大饗のおりの、ひんがしのたいのつまの紅梅のえんにさかりなりしも、此頃はこしげくてみどころもなし。御誦経東宮よりはじめてみなせさせ給へり。かのよろづのあにぎみ、たゞいま三位中将ときこゆ。宰相にだになしきこえ給はずなりぬるを、心うくおぼすべし。はかなう年月もくれもていきて、正暦二年に



なりにけり。されどことしは、みやの御前も、さ
べきとのばらも、御服にて行幸もなし。摂政
殿の御まつりごと、たゞいまはことなる御そし
られもなく、おほかたの御心ざまなども、いとあて
によくぞおはしますに、きたのかた御ちゝぬし、
二位になさせ給へれば、高二位とぞよにはいふ
める、としおいたる人の、ざえかぎりなきが、心
ざまいとなべてならずむくつけくかしこき人に
おもはれたり。きたのかたひとつばらのさべき
くにぐにのかみどもにたゞなしになさせ給へ
り。この人々のいたうよにあひてをきてつかう
まつるをぞ、人やすからず、やむごとなからぬ
おほんなからひを、こゝろゆかず申思へり。きたの
かたもとより道心いみじうおはして、つねに
経をよみ給、やまやまてらてらの僧どもをた
づねとはせ給へば、哀にうれしきことに申おも
へり。かゝる程に、円融院の御悩ありて、いみじ
う世のゝしりたり。おりしもことし行幸なか
りつるを、おぼつかなくおぼし聞えさせ給程に、
かゝることのおはしませば、行幸けふあすとおぼし
いそがせ給。さてよき日して行幸あれば、いみじう
くるしげにおはします。みかどいまは御かうぶりなど



せさせ給ひて、おとなびさせ給へるを、返こかひ
ありて見たてまつらせ給。さべき御領の所々、さ
べき御たからものどもかきたてもくろくせさ
せ給へりけるを、それみな奉らせ給。みかどもわかう
おはしませど、いかにいかにとおぼしなげかせ給。ゐんは
たゞさらに聞えさせず、つねの行幸ににぬお
ほん有さまもいみじう哀にて返々おぼし見
たてまつらせ給。御ものゝけもおそろしければ、「と
くかへらせ給ね」とて、返し奉らせ給つ。さておぼ
つかなきをいかにいかにとおぼし聞えさせ給程に、ひ
ごろありて、正暦二年二月十二日にうせさせ給ぬ。

こゝらのとしごろなれつかうまつりつるそうぞ
く、殿上人、判官代、なみだをながしまどひたり。
いはんかたなし。仁和寺の僧正ときゆるは、つちみ
かどの源氏のおとゞの御はらからにおはす、に
わじのみことときこえけるみこにおはす、いみ
じうおぼしまどふ。かの釈尊の御にうめつの心
ちして、「大師入滅、我随入滅」と憍梵波提がいひ
て、水になりてながれけん心ちする人いと
おほかり。あはれにかなしともをろかなり。うち
には一日の行幸の御ありさまおぼしいでゝ
こひきこえさせ給。